

札幌市立大学

教員研究紹介

2025



札幌市立大学

SAPPORO CITY UNIVERSITY

札幌市立大学

教員研究紹介

2025

札幌市立大学は、デザインと看護の2学部、2研究科、助産学専攻科を設置し、「人間重視」と「地域社会への貢献」を基本理念に掲げ、デザインと看護の特色を活かした教育・研究・社会貢献活動に取り組んでいます。また、2022年度にAITセンターを設置し、AIとITに関する研究を行うとともにデザインと看護をAIが下支えする研究にも取り組んでいます。

本冊子は産学官金連携・地域連携等にさらに積極的に取り組むため、多くの方々に本学教員の研究事例をご紹介することを目的に発行いたしました。札幌市立大学教員の研究活動に関心を持っていただければ幸いです。



札幌市立大学

1. デザイン学部

No	専門分野	職位	氏名	研究課題名	頁
1	人間空間デザイン	教授	椎野 亜紀夫	「子育ての場」としての公園利用状況に関する研究	1
2	人間空間デザイン	教授	齊藤 雅也	札幌市円山動物園「オランウータンとボルネオの森」冬季の室内気候の実測による検証	1
3	人間空間デザイン	教授	西川 忠	焼成した札幌軟石の外装材としての性能向上と新たなデザイン	2
4	人間空間デザイン	教授	森 朋子	ネパール地震から10年、歴史的集落の復興のあり方を考える	2
5	人間空間デザイン	特任教授	遠藤 謙一良	建築×[自然×地域性×身体性×合理性]で快適な未来を創造する	3
6	人間空間デザイン	准教授	大島 卓	環境“と”デザインする	3
7	人間空間デザイン	准教授	片山 めぐみ	「コミュニティマルシェ 八百カフェ」におけるケアコミュニティデザイン	4
8	人間空間デザイン	准教授	金子 晋也	土着的な建築デザインに関する調査と実践	4
9	人間空間デザイン	准教授	小林 重人	デジタル地域通貨「Gene（ジェネ）」の開発と実証実験	5
10	人間空間デザイン	准教授	古俣 寛隆	森林と木材のよい利用の仕方	5
11	人間空間デザイン	准教授	小宮 加容子	さわって楽しいあそびのデザインに関する研究	6
12	人間空間デザイン	准教授	御手洗 洋蔵	街中ガーデンで健康的な都市空間をデザイン	6
13	人間空間デザイン	准教授	山田 信博	寒冷地住宅の窓面積と居住者意識に関する研究	7
14	人間空間デザイン	特任准教授	吉田 修	寒冷地における高断熱住宅の「外層空間」の活用	7
15	人間空間デザイン	講師	石田 勝也	環境の変化を感じるためのメディアアート表現の可能性	8
16	人間空間デザイン	講師	須之内 元洋	文化・歴史の継承のためのメディアデザイン	8
17	人間空間デザイン	講師	藤沢 礼央	地域社会におけるアートの作用	9
18	人間情報デザイン	教授	石井 雅博	視標数が視線移動の反応時間に及ぼす影響	9
19	人間情報デザイン	教授	伊藤 健世	円山動物園モンキーハウスにおける顧客体験最大化のためのデザイン研究	10
20	人間情報デザイン	教授	柿山 浩一郎	札幌市路面電車（低床車両）のラッピング広告ガイドラインの設計	10
21	人間情報デザイン	教授	藤木 淳	アートと連動した初等プログラミング教育教材の開発	11
22	人間情報デザイン	教授	細谷 多聞	空気膜構造を使った子どものためのあそび場の研究	11
23	人間情報デザイン	教授	三谷 篤史	ヨーロッパの遊具を元にした木製玩具「ユールボード」の開発	12
24	人間情報デザイン	准教授	金 秀敬	課題展開力の構成要素と自己効力感に関する異分野比較研究：イマーシブ技術・AI活用教育モデル設計への基盤的考察	12
25	人間情報デザイン	准教授	福田 大年	まちなか動物園：身の回りの見立て観察から立ち上がる創造性	13
26	人間情報デザイン	准教授	横溝 賢	経験を語らうことから現れる〈共創する時空〉－ランプリングデザイン運動が喚び起こすトポフィリア（場所愛）－	13
27	人間情報デザイン	講師	大淵 一博	南区役所との授業協力から発展した地域貢献	14
28	人間情報デザイン	講師	松永 康佑	円弧を用いた平面充填図形に関する研究	14

No	専門分野	職位	氏名	研究課題名	頁
29	人間情報デザイン	助教	榎田 聡志	水素アシスト型ペロタクシー「PIONIE」のデザイン開発・展示	15
30	人間情報デザイン	助教	矢久保 空遥	共感覚的比喩に着目した感性発現メカニズムの研究	15
31	人間情報デザイン	助教	吉田 彩乃	IT を活用した地域の課題解決や分析	16
32	人間情報デザイン	助教	渡部 大志	最適化によって現れる構造を探る	16
33	共通教育	教授	松井 美穂	アメリカ南部文学研究	17
34	共通教育	准教授	丸山 洋平	移動経験と家族形成に対する考えとの関係	17
35	共通教育	准教授	並木 翔太郎	ライフデザイン思考導入ワークショップの開発	18

2. 看護学部

No	専門分野	職位	氏名	研究課題名	頁
36	基礎看護学領域	教授	樋之津 淳子	大学と医療施設の協働による看護師の遠隔会議システムを用いた継続教育の効果	19
37	基礎看護学領域	教授	檜山 明子	医療施設での転倒予防看護と地域在住高齢者の転倒予防方略	19
38	基礎看護学領域	准教授	武富 貴久子	看護師の経験を紡ぐリスクリング - 学びあう場としての看護コンソーシアムにおける研修モデルの検証 -	20
39	基礎看護学領域	講師	中平 紗貴子	自己調整学習に関する研究	20
40	基礎看護学領域	講師	三戸部 純子	薬剤情報の識別エラーについての実験的検討	21
41	基礎看護学領域	助教	本多 いづみ	患者の苦痛を軽減する看護技術	21
42	基礎看護学領域	助教	吉田 実和	血圧測定技術に関する研究	22
43	看護管理学領域	教授	松野 千代美	急性心筋梗塞発症後患者のセルフケア行動評価アプリケーションの開発	22
44	看護管理学領域	准教授	鬼塚 美玲	積雪寒冷期の地震災害における災害看護活動に関する研究	23
45	看護管理学領域	助教	樋口 佳耶	医師から看護師へのタスク・シフト / シェアを推進する政策が看護師の業務に及ぼす影響	23
46	小児看護学領域	教授	奈良間 美保	「こどもの感覚」を実感する体験でつながる医療的ケア児の家族と看護師の関係性に関する研究	24
47	小児看護学領域	准教授	加藤 依子	食物アレルギーのある子どもと家族の Well being を支えるための包括的な支援について Patient and Public Involvement の観点から検討をしています	24
48	小児看護学領域	講師	牧田 靖子	乳幼児の「窒息・誤飲」事故の実態と事故予防対策	25
49	母性看護学領域	教授	荒木 奈緒	胎児異常を診断された女性への助産師の支援	25
50	母性看護学領域	講師	石引 かずみ	出産時における Women-centered care (女性中心のケア)	26
51	母性看護学領域	講師	岡 園代	新生児集中ケアの臨床判断と技法	26
52	母性看護学領域	講師	小野澤 かおり	出生前検査の結果による選択的人工妊娠中絶に対する看護大学生の考え	27
53	母性看護学領域	講師	久保田 祥子	日本における「Sexual Compliance」の実態把握	27

No	専門分野	職位	氏名	研究課題名	頁
54	母性看護学領域	助教	寺林 加菜子	無痛分娩と非無痛分娩における産後の疲労感の比較 —初産婦の産後4ヶ月までの縦断研究—	28
55	成人看護学領域	教授	卯野木 健	ICU 退院後 4 年間の長期メンタルヘルス経過	28
56	成人看護学領域	教授	川村 三希子	①「認知症高齢がん患者の痛みのマネジメントに対するシミュレーション教育プログラムの開発 ②がんサバイバーのヘルスリテラシーに関する研究	29
57	成人看護学領域	教授	菅原 美樹	①二次救急医療機関の救急外来看護師のコンピテンシー評価指標の開発 ②クリティカルケア看護専門看護師の直接ケアコンピテンシーに関する研究	29
58	成人看護学領域	准教授	高橋 奈美	筋萎縮性側索硬化症患者とその家族への支援	30
59	成人看護学領域	准教授	牧野 夏子	看護師を対象とした外傷看護教育に関する研究	30
60	成人看護学領域	講師	工藤 京子	高齢化が進む日本（札幌）において認知症マフの認知度をあげる	31
61	成人看護学領域	助教	栗原 知己	集中治療室に入院する患者様の入院中から社会復帰までを支える看護を考える	31
62	成人看護学領域	助教	澤口 宙人	治療中のがん患者が症状を自己報告するためにスマートフォンアプリを用いた研究	32
63	成人看護学領域	助教	平山 憲吾	薬物療法を受ける高齢患者の意思決定における医療者の認識に関する研究	32
64	老年看護学領域	教授	貝谷 敏子	大学とチームオレンジの共同活動が生むコミュニティ・エンパワメントへの影響	33
65	老年看護学領域	准教授	原井 美佳	積雪寒冷な中山間地域に暮らしてきた高齢女性の地域活動の経験についての研究	33
66	老年看護学領域	助教	西川 めぐみ	腎臓移植レシピエントとドナーへの支援に関する研究	34
67	老年看護学領域	助教	松浦 有沙	脳卒中患者の終末期ケアに対する看護師の実践と困難感	34
68	精神保健看護学領域	准教授	石橋 佐枝子	児童・青年期の精神症状や困難さを抱えるお子さんとそのご家族への支援	35
69	精神保健看護学領域	准教授	守村 洋	メンタルヘルスに関する研究	35
70	精神保健看護学領域	助教	渋谷 友紀	シミュレーション教育で磨く看護実践力とその成果の評価	36
71	在宅看護学領域	教授	青柳 道子	終末期がん患者の望む生き方を支える看護師の対話力獲得過程に関する研究	36
72	在宅看護学領域	特任講師	服部 裕子	新卒（新人）訪問ナース育成支援に関する研究	37
73	在宅看護学領域	助教	尾立 斗志世	成人前期に難病を発症した人の社会参加に関するレジリエンスの研究	37
74	在宅看護学領域	特任助教	原口 弘美	精神科病院での勤務経験がない訪問看護師による統合失調症の利用者への看護ケアに関する研究	38
75	地域看護学領域	教授	上田 泉	妊娠期の父親支援ニーズに立脚した日本版 BPP の実証的研究	38
76	地域看護学領域	教授	本田 光	あらゆる世代、健康状態、社会状態にある人々の“つながり”の重要性	39
77	地域看護学領域	准教授	市戸 優人	アクティブラーニングを取り入れた“話し合う性教育”の提案	39
78	地域看護学領域	助教	近藤 圭子	過疎地域に居住する高齢者の健康に関する研究	40
79	地域看護学領域	助教	田仲 里江	大規模災害時等の遺族ケアにおける保健師の役割	40

3. AIT センター

No	専門分野	職位	氏名	研究課題名	頁
80	情報学	教授	高橋 尚人	物体検出・物体追跡技術を用いた交通量調査プログラムの開発	41
81	情報学	特任教授	津田 一郎	カオス力学を基軸にした複雑系脳科学	41
82	情報学	助教	岡崎 昌太	深層学習による放射線画像からの歯科口腔疾患の検出	42

2025.4.1 現在

1. デザイン学部

椎野 亜紀夫

教授 デザイン学部（人間空間デザインコース）

SHIINO Akio

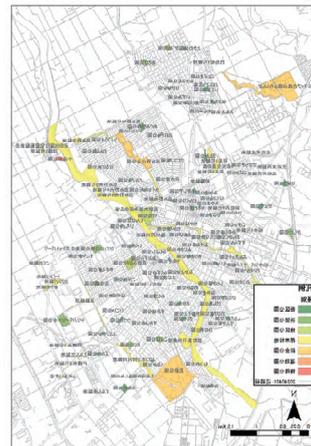
キーワード：幼児、保育施設、公園、利用、安全

「子育ての場」としての公園利用状況に関する研究

【研究の概要】

恵庭市の保育施設（保育所、認定こども園）20箇所を対象に、園外活動の場としてどのように公園を利用しているのか調査・研究を行った。調査の結果、保育施設による公園利用は親子連れなどの一般利用者とは異なり、保育士や教諭が複数の幼児を引率して利用するため、利用する遊具の設置数が不足しがちであること、過去に公園敷地境界にあった金属製の柵が老朽化し、施設更新のタイミングで耐用年数の長い外柵石に変更されたことで幼児が車道へ飛び出す危険性が高まり、当該公園の利用をやめたことなどが確認された。

公共施設である公園は不特定多数の利用に供される空間であるが、保育施設に近接する公園は定常的に幼児利用が見込まれることから、特に利用の安全に関して特段の配慮が必要と考えられる。



図：市内の公園配置



写真：金属製柵→外柵石への変更

齊藤 雅也

教授 デザイン学部（人間空間デザインコース）

SAITO Masaya

キーワード：動物園、オランウータン、室内気候、実測

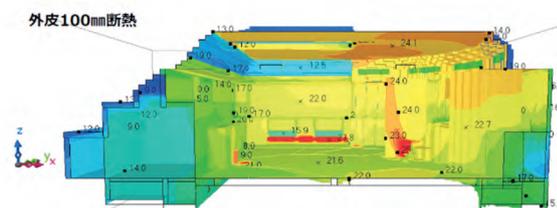
札幌市円山動物園「オランウータンとボルネオの森」 冬季の室内気候の実測による検証

【研究の概要】＜2024年度受託研究＞

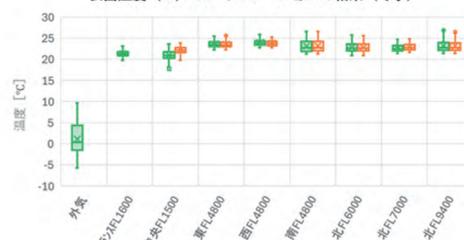
「動物福祉」に配慮して2021年に設計された同施設は、2023年10月に竣工し、2024年5月に開館した。2025年2～3月の冬季において室内気候を実測し、設計どおりに運用ができていないかを検証した。

同施設は「外断熱工法」が採用されていることにより、外気温が0℃前後で、適度な温放射によって室温・グローブ温度（≒表面温度）ともに20～23℃を維持していた。上下温度分布もなく安定した室内気候を維持していた。

また、室内での定期的な散水による加湿操作も有効に機能していた。



表面温度（℃）のシミュレーションの結果（冬季）



空気温度（緑）・グローブ温度（オレンジ）の実測結果



西川 忠

教授 デザイン学部（人間空間デザインコース）

NISHIKAWA Tadashi

キーワード：建築材料、外装材、地場資源、札幌軟石

焼成した札幌軟石の外装材としての性能向上と新たなデザイン

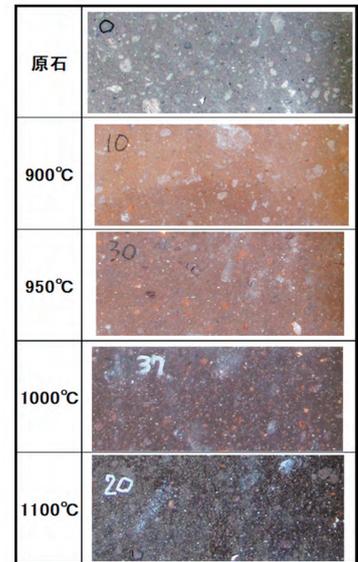
【研究の概要】

札幌軟石は北海道の開拓時代から建築資材として使われ、今でも市内の随所で札幌軟石を使った建築物を見ることができる。現代では、札幌軟石を構造材料として使うことはなくなったが、内外装材として使用されている。

札幌軟石は石材としては軟らかく加工しやすい反面、強度が小さいので割れや欠けを生じやすい。また、吸水しやすいため積雪寒冷地では凍結融解による劣化（凍害）を生じやすい弱点がある。

札幌軟石を陶芸のように高温で焼成すると、右写真に示すように、焼成温度によってオレンジ～赤紫色に変色する。これを利用して色のバリエーションを使った札幌軟石のデザインができる。また、焼成温度が高いほど強度が大きく、かつ吸水率が小さくなる。1000℃で焼成した札幌軟石の圧縮強度は原石の5倍以上になり、吸水率は磁器質（食器など）相当となる。それによって、強度が大きく、当該劣化を生じにくくなる。

このように、焼成した札幌軟石を用いることで、外壁に色変化をつけたり、より強度が大きく劣化しにくい外装仕様が可能になる。



焼成温度による色変化

森 朋子

教授 デザイン学部（人間空間デザインコース）

MORI Tomoko

キーワード：都市デザイン、歴史的環境保全、文化的景観、景観計画

ネパール地震から10年、歴史的集落の復興のあり方を考える

【研究の概要】

2018年の着任以前から取り組んでいる、2015年ネパール地震で大きな被害を受けた世界遺産暫定リストにあるKhokana集落の調査研究プロジェクトについて、紹介させていただきます。

世界遺産「カトマンズ盆地」は、1979年にネパール最初の世界文化遺産として、3つの王宮と4つの寺院等を構成資産に登録されました。盆地には、Khokanaを含む4つの暫定リストがあります。これらは、かつての交易路の拠点として発展した町や中世の建築群が残る町、その土地特有の集落など、王宮周辺に展開した農民を中心とする一般的な人々の居住地で、「生きた遺産」です。

2015年ネパール地震では、世界遺産も暫定リストも大きな被害を受けました。2015年9月から2020年度まで続いた文化庁予算による東京文化財研究所の事業に参画し、特に再建が進むRC造の民家のデザインガイドラインを提案し、なんとか歴史的集落景観を継承できないかと考えました。しかし、3月に久々に訪問し、民家は建て替わったにも関わらず、寺院や共有空間は伝統的な構法で復興されて日常儀礼が継承され、かつての雰囲気を決して失っていませんでした。歴史的集落の復興の本質的あり方に、10年を経てようやく気づきました。この経験を活かし、研究を続けます。



Rudryanee 寺院, 2019.12 (左), 解体復元工事中 2025.3(右)

遠藤 謙一良

特任教授 デザイン学部（人間空間デザインコース）

ENDO Kenichiro

キーワード：新しい建築、空間、環境、地域、街、場所の創造

建築×〔自然×地域性×身体性×合理性〕で快適な未来を創造する

【研究の概要】＜建築の創造＞

建築計画にあたり諸条件を整理し、地域性・身体性・合理性の視点で様々な角度から都市・建築創造の可能性を考察し、感性に響く唯一の建築・場所の創出について考え研究します。

1. 自然の豊かさを学ぶ

地球・地域の自然の豊かさを、科学的・生態的・気候的視点から学ぶ

2. 地域性について

計画地の気候・風土・地形・周辺環境・資源・経済・産業・歴史・文化の視点から建築を考察し、〔建築×地域〕から唯一の魅力ある場所の創出について研究する

3. 身体性について

人間が地域・街・場所・建築に対峙し体感する事で感じる、空間・記憶・イメージを様々な視点（哲学・文化人類学・記号学・脳科学・温熱）から考察し、〔建築×身体〕の未来と可能性を研究する

4. 合理性について

〔街（地域）×建築×家具〕をサステイナブルな視点で考える／木造の可能性を考える／自然エネルギーの活用・建築技術・構法から快適な建築環境を考える／ウォークアブルシティ・ウェルビーイングを学び、北海道・札幌の快適で心身に響く都市・街の可能性を考える



大島 卓

准教授 デザイン学部（人間空間デザインコース）

OSHIMA Makoto

キーワード：ランドスケープデザイン、牧場景観、地域再生、産業遺産の動態保全

環境“と”デザインする

【研究の概要】

landscape（ランドスケープ）の語源であるドイツ語のlandschaft（ラントシャフト）は、「地域」を意味し、土地や地方といった意味も含まれています。人々の営み（文化的営為）によって示される地域的なまとまり、それが本来のラントシャフトといわれています。風景・景観といった環境の眺めを示す意味に留まらず、ランドスケープ概念が本来有していた「地域における土地と人々の営み」という多義的な捉え方で、私は「環境デザイン」を自身の研究分野としています。加えて環境デザインは「環境“を”デザインする」のではなく、「環境“と”デザインする」分野であるという視点のもと、地域に埋もれていると想定される未評価の地域資源の認識・評価・活用に向けたデザイン手法構築を目指し、研究・実践活動を行っています。



片山 めぐみ

准教授 デザイン学部（人間空間デザインコース）

KATAYAMA Megumi

キーワード：コミュニティデザイン、マルシェ、プライマリケア、フリースクール

「コミュニティマルシェ 八百カフェ」におけるケアコミュニティデザイン

【研究の概要】

2022年度にデザイン学部の授業から始まった八百カフェは、2024年度に看護学部や外部の医師、理学療法士、歯科衛生士、整体師などが連携するケアコミュニティに発展した。デザイン性豊かな商品の購入やパフォーマンス鑑賞といった楽しみのついでに健康チェックや体操教室を利用できる場になっている。「地域のイベントに参加しているうちに気がいたらケアに繋がっていた」という仕掛けづくりは、既成の事業にとらわれない先進的かつ先駆的な取り組みである。また、こども達が得意なことで出店できるフリースクールも試みた。社会との繋がりの中で成功体験や自己肯定感を育む工夫である。他のお祭りでの出店や現実の店舗で商品を販売するようになった児童が出てきたことが成果である。

以上の成果は同様の地特性や課題を抱えた他市町村への波及や発展性が見込まれ、北海道地域福祉学会「第7回優秀実践賞」を受賞した。



金子 晋也

准教授 デザイン学部（人間空間デザインコース）

KANEKO Shinya

キーワード：建築デザイン、空間デザイン、地域資源、土着

土着的な建築デザインに関する調査と実践

【研究の概要】

これまでの研究では、空間構成や建築構法の観点から、鯉漁家建築（日本海沿岸部）、昆布番屋（羅臼町）、一棟二戸（函館市）などの現地調査を行い、北海道の木造建築の形態的特徴の一端を解明してきました。近年では、木造建築以外に、札幌市の交通建築や小樽市の公共建築など、戦後の建築（近現代建築）を対象とした現地調査を行っており、北海道の建築文化の価値について考えています。また、「石の町」や「文化的・生態的景観」のように、他大学との共同研究や日本建築学会の委員会を通じて、まちづくりの基礎的な研究も行っています。

また、厚真町をフィールドとして、胆振東部地震で被災した地区のあり方を学術的な観点から提案した研究（2020年から現在）や、学生たちとDIYを行いながら空き家の活用を考える実践的な研究（2021年から現在）も行っています。2024年度は、伝統的な漆喰づくりから施工体験のワークショップを実施しました。これらの研究を通じて、分析的な視点（調査）だけでなく、体験を通じた視点（実践）も得てきました。今後は、調査と実践を両輪として、地域貢献や国際的な展開も視野に入れた研究を展開したいと考えています。



小林 重人

准教授 デザイン学部（人間空間デザインコース）

KOBAYASHI Shigeto

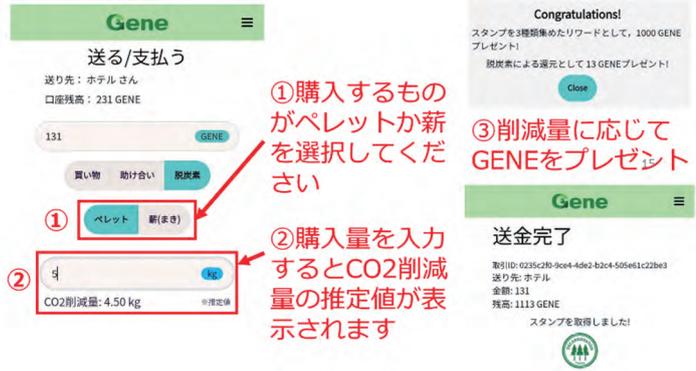
キーワード：ソーシャルデザイン、進化経済学、複雑系科学、社会シミュレーション、知識科学

デジタル地域通貨「Gene（ジェネ）」の開発と実証実験

【研究の概要】

木質バイオマス熱エネルギーの普及を目指したデジタル地域通貨「Gene（ジェネ）」を開発し、山形県最上町をフィールドに2024年10月から2025年1月までの約3ヶ月間に渡って実証実験を行いました。

開発したデジタル地域通貨は、お店でお買い物ができるだけでなく、脱炭素に関わる取引量（ペレットや薪の購入）に応じてデジタル地域通貨が還元されるとい仕組みを導入しました。この仕組みによって木質バイオマス熱エネルギーを選択することの動機付けを狙っています。他にも取引データを分析することによって、どのような属性の人たちがどのようなお店で商品を購入しているのかということやどのようなイベントを介して人々がつながりを形成しているのかということを可視化することを行っています。人々の購買行動やボランティア活動を可視化することにより、より効果的な施策をどのタイミングでどのような人たちに対して実施すればよいのかを科学的な証拠にもとづいて明らかにすることができます。



古俣 寛隆

准教授 デザイン学部（人間空間デザインコース）

KOMATA Hiroataka

キーワード：ライフサイクルアセスメント、森林・木材・木質材料・木質エネルギー、製造原価・採算性

森林と木材のよい利用の仕方

【研究の概要】

自然由来の木材は環境にやさしいと言われていいます。ところが、その根拠は？と聞かれると明確に答えられる人は少ないのではないのでしょうか。私は、製品やサービスの環境へのやさしさを評価する手法「ライフサイクルアセスメント（LCA）」を用いて、建築材料やエネルギーとしての木材の持つ環境優位性を数値で表す研究を行っています。LCAにより、例えば、国産と輸入建築材、木造と鉄骨造建築に関する温室効果ガス排出量を比較することができます。

さて、環境にやさしいことが分かったとして、実際に木材利用を進めるためには、経済的な視点が必要になります。つまり、どのくらい儲かるか、地域にどのくらいお金を落とせるのかなどです。これらの計算には、森林資源量、製造工場の規模、原料価格、需要量などの条件が必要になり、ステークホルダーとのディスカッションが欠かせません。

上記以外にも、様々な手法やシミュレーションを通じた課題解決の提案をしていきたいと考えています。



小宮 加容子

准教授 デザイン学部（人間空間デザインコース）

KOMIYA Kayoko

キーワード：あそびのデザイン、キッズデザイン、
ユニバーサルデザイン

さわって楽しいあそびのデザインに関する研究

【研究の概要】

誰もが楽しむことができ、かつ、様々な「さわる」を経験できるあそび「さわってあそぼう！」を2024年7月28日（日）、札幌市民交流プラザ SCARTS モール C にて実施しました。会場には大きく分けて2つのあそび場を設けました。

一つは、自由に形状を変えることができる長いひも状の形状をしたビーズクッションのあそび場です。直径（横幅）が0.4M程度の、長さ6Mと4Mの2本のビーズクッションのようなあそび道具を制作し、会場の中心に配置しました。中には小さな粒だけでなく、テニスボールほどのサイズのビニールボールなども入れており、手だけでなく体全体で手触りの違いを感じることができるようになりました。子どもたちは、あそび道具を体に巻き付けてみたり、積んでその上に登ったりしながら、体全体で「さわる」体験を楽しんでいました。

もう一つは、太さ・温度・風圧・重さ・粗さを体験するあそび場です。視覚からの情報を遮断するために箱の中に手を入れて触るような工夫をしていたため、子どもたちは指先や手のひらの感覚に集中し、自分のカラダとの対話を楽しむ様子がみられました。



御手洗 洋蔵

准教授 デザイン学部（人間空間デザインコース）

MITARAI Yozo

キーワード：緑の健康効果、都市園芸、コミュニティガーデン

街中ガーデンで健康的な都市空間をデザイン

【研究の概要】

現代社会では、日常生活のさまざまな場面でストレスや閉塞感を抱える人が増えています。こうした課題に対し、私は「街中ガーデン」を通じて、健康的で快適な都市空間をデザインする研究に取り組んでいます。「街中ガーデン」とは、貸農園や公園の花壇など、都市に点在する緑地空間を指します。こうした場所での園芸活動は、単なる趣味にとどまらず、心のリフレッシュやストレス解消につながるとともに、適度な運動による健康維持にも寄与します。また、共に活動することで人とのつながりが生まれ、収穫物の交換などを通じて地域コミュニティの形成にも貢献できる可能性があります。私は、このような人々の健康増進に寄与する「街中ガーデン」をより多くの地域に広げることを目指し、実施者や関係者へのアンケートやヒアリングを通じた調査研究を行っています。その成果を都市づくりに還元し、誰もが心身ともに健やかに暮らせる環境の創出に貢献していきたいと考えています。



山田 信博

准教授 デザイン学部（人間空間デザインコース）

YAMADA Nobuhiro

キーワード：寒冷地、住宅、窓

寒冷地住宅の窓面積と居住者意識に関する研究

【研究の概要】

寒冷地住宅の窓面積と居住者意識との関係性に関する調査結果。札幌市の平均開口率は7.4%、仙台市の平均開口率は16.5%、福岡市の平均開口率は25.4%であった。自宅窓の満足度は「小さい」の評価が低く64%が「満足していない」であった。窓が小さいことによるマイナス点は「通風」「日射」「閉塞感」であった。現在寒冷地で普及している窓は性能が向上しており、今後は開口率の向上が期待される。

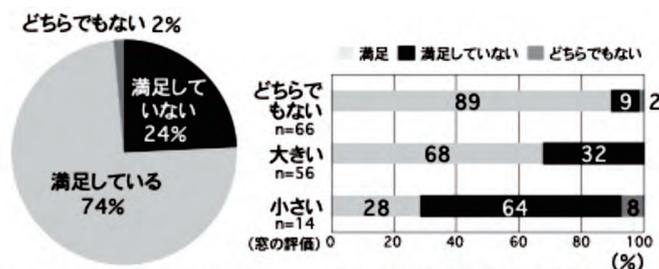


図1 自宅居間の窓の満足度

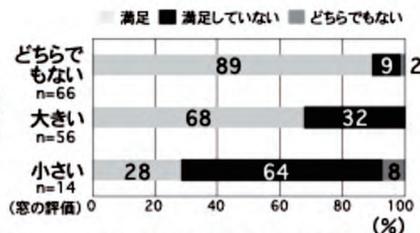


図2 自宅の窓の評価と満足度

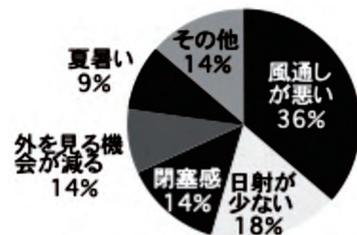


図3 窓が小さいことによるマイナス点

吉田 修

特任准教授 デザイン学部（人間空間デザインコース）

YOSHIDA Osamu

キーワード：建築設計、空間デザイン、ものづくり、環境調整行動、プロダクトデザイン

寒冷地における高断熱住宅の「外層空間」の活用

【研究の概要】

本研究は、寒冷地の戸建て高断熱住宅における新たな内外環境の関係構築をテーマとし、風除室やサンルームなど、住宅の外皮（外気に接する屋根・壁・開口部など）の外側に付設された空間（以下、「外層空間」）に着目した。外皮に外付けされた凸型外層空間と、外皮に内包された凹型外層空間を、その空間の熱特性と住まい手の環境調整行動を調査し、その成果から、高断熱住宅の内外環境の関係構築における「外層空間」の可能性について考察した。

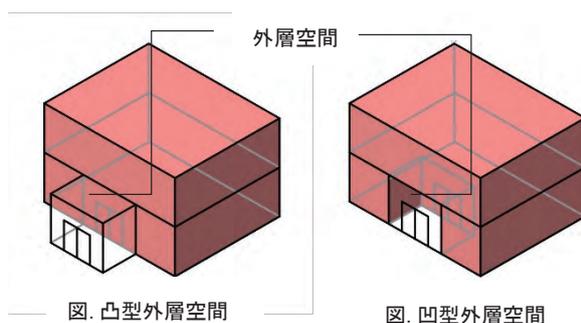


写真. 凹型外層空間の活用事例（筆者撮影）

石田 勝也

講師 デザイン学部（人間空間デザインコース）

ISHIDA Katsuya

キーワード：メディアアート、環境情報、
アートエンジニアリング、空間演出

環境の変化を感じるためのメディアアート表現の可能性

【研究の概要】

年々悪化の一途をたどる環境の変化。私たち人類はこの地球からの警告についてどのような姿勢でいるべきなのでしょう。シェルター化してしまった都市空間に生きている私たちは、南極や北極で大量の氷が溶けていることも、干ばつで干からびてしまった湖がいくつもあることもニュースでは聞くけれども身近なものとして体感しているとは言えません。自然環境は地球という惑星の大気の循環システム、連関によって変化しています。いくら私たちの都市空間をシェルター化しても、その連関の外側にいることはできません。むしろ、シェルター化によって連関を崩しつつあるのが今の状況なのです。

自身の研究は、このような環境と人との問題をアートという表現方法で顕在化する試みを続けています。その上で昨年 2024 年は札幌国際芸術祭 2024 にて、自身の所属する SIAF ラボの様々な試みを紹介する展示を行いました。除雪された雪の壁を 3D スキャンした除雪彫刻、除雪車が市内を回る GPS データをビジュアル化した作品、また吹雪にレーザー光を当てることで吹雪の力強さを表現するインスタレーションなど、これまで行ってきた環境にまつわるアート作品の展示を行いました。



須之内 元洋

講師 デザイン学部（人間空間デザインコース）

SUNOUCHI Motohiro

キーワード：メディア・アーツ、アーカイブ情報学、
メディアデザイン、知覚情報学

文化・歴史の継承のためのメディアデザイン

【研究の概要】

デザイン・芸術・芸能・学術など様々な分野の歴史や文化資産を、現在に活かし・未来に継承していくためのメディアのデザイン、記録や表現を支える技芸の開発を行っています。

例えば近年、道内の芸術関係者らが主体となり、北海道の文化芸術活動の記録をデジタルアーカイブ化しようというボトムアップな活動「北海道文化芸術アーカイブセンター HACAC」が動き始めています。こうした活動をどのようにサポートすることができるのか。こうしたボトムアップなデジタルアーカイブを、どのようにしたら持続的な価値あるメディアにしていけるのか。これらの課題解決にむけて、デジタルアーカイブの技術的側面、法的側面、運営的側面からの試みを続けています (<https://hacac.jp/> 右図)。

その他、日本各地で展開されるアートプロジェクトのデジタル・アーカイブや、オンライン上の植物知識を集約・検索・活用できるシステムの開発、日本を代表する現代美術キュレーターの仕事をデータベース化し、共有・利活用を促進するデジタルアーカイブの設計・デザインも行っています。



藤沢 礼央

FUJISAWA Reo

講師 デザイン学部（人間空間デザインコース）

キーワード：アート、工芸、ものづくり、ワークショップ、
地域実践

地域社会におけるアートの作用

【研究の概要】

地域社会、地域文化の現場にアート体験を挿入することは、多角的な視点の獲得や多様な意見の受容、他者への尊重を育むための土壌づくりとなる可能性がある。ここでのアートとは生きる知恵や生きる技術というような人や人を取り巻く世界を捉える方法論として使用する。ではどのような形でアートを体験し得るのか。一つには作品鑑賞や芸術祭のような非日常的な出会いもあるが、私の研究では日常的な連続性と継続性に重点を置いた活動の中で、示唆的にアートの要素を盛り込む一方、体験者はアートとは気づかぬほど些細な体験を積み重ねていく。長期的な参与観察を行うことでそれら積み重ねによる変化が可視化され、慣習や慣例、強固なシステムがほぐれ緩やかな構造の変化が確認できる。今後は参与観察の分析とアートがもたらした作用の普遍性や汎用性を探っていく。



石井 雅博

ISHII Masahiro

教授 デザイン学部（人間情報デザインコース）

キーワード：ヒックの法則、眼球運動、選択反応時間、
サッカード潜時、アイトラッカー

視標数が視線移動の反応時間に及ぼす影響

【研究の概要】

人の意思決定において、選択肢の数が増加すると選択反応時間は長くなる。この事象はヒックの法則（またはヒック-ハイマンの法則）と呼ばれる。本研究では、単純反応課題のような、意思決定が求められない状況での選択においてもヒックの法則のような事象が現れるかを調べた。

実験参加者に、視野中央の注視点を注視させておき、視野周辺に突然出現する視標に視線を移動するように指示すると、跳躍性眼球運動（サッカード）が視標に向けて行われる。なお、一般的にサッカードは視標が出現してから約 200 ミリ秒後に生じ、この時間をサッカード潜時と呼ぶ。本研究では、視野周辺に出現する視標の数を変化させ、アイトラッカーを用いてサッカード潜時が変化するか調べた。視野周辺に出現する視標は全て同じ形状とし、実験参加者には、指標は全て同じであることと、どの視標でもよいのでできるだけ早く視線を移動するように指示した。

実験の結果、指標数の増加に伴ってサッカード潜時が長くなる実験参加者が多いことがわかった。しかし、指標数が増加しても潜時が変化しない実験参加者や潜時が短くなる実験参加者がいることがわかった。

伊藤 健世

教授 デザイン学部（人間情報デザインコース）

ITO Kensei

キーワード：UX デザイン、情報デザイン、心理学

円山動物園モンキーハウスにおける顧客体験最大化のためのデザイン研究

【研究の概要】

円山動物園の「モンキーハウス」での来場者の顧客体験を最大化するための工夫や、リピーター率向上に向けた施策として、来場者満足度の向上を目指した見学コースのデザイン研究を実施。

具体的な実装提案：

- ・暗所での五感の研ぎ澄まし効果を利用した、エントランス部の新規建屋
- ・情報の一元化と分散化を考慮した情報デザインと、子どもの関心と発見のためのデザイン
- ・モンキーの飼育環境と、人間の見学環境の同一化による心理的没入感の増幅
- ・疑似ふれあい体験による野生動物への知覚や親近感



※ 本研究は、複数の教員と学生の学内プロジェクトで行っている。上記の効果検証については研究継続中。

柿山 浩一郎

教授 デザイン学部（人間情報デザインコース）

KAKIYAMA Koichiro

キーワード：景観配慮広告、デザインガイドライン

札幌市路面電車（低床車両）のラッピング広告ガイドラインの設計

【研究の概要】

これまでの札幌市の路面電車事業では、新型車両に関してはその高いデザイン性から、ラッピングを行う広告商品は展開されてこなかった。しかし、経営の健全化が課題となり、2023年1月から検討が開始され、2024年3月に新型車両のラッピング広告商品の販売が開始された。

本研究では主に、先行研究調査を通じた実施方針の明確化と、審査基準の検討、試行デザイン車両の試験走行を対象とした市民アンケートを通じたデザインガイドライン案を作成した。

審査基準の提示に対する、広告代理店のデザイン案と審査委員の採点結果の振れ度合いから、ガイドラインの評価が可能になる可能性を提示した試みが特徴的であった。



藤木 淳

教授 デザイン学部（人間情報デザインコース）

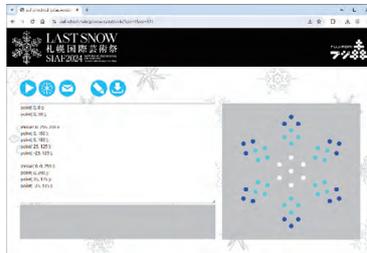
FUJIKI Jun

キーワード：メディアアート、STEAM 教育、地域アート

アートと連動した初等プログラミング教育教材の開発

【研究の概要】

近年 STEAM 教育が推進されています。このような現状を踏まえて、アートと連動した初等プログラミング教材を開発し出前授業で実践、またその成果発表を実施しています。具体的には、札幌国際芸術祭 SIAF スクール事業を通して、簡単なプログラミングでオリジナルの雪の結晶や星、木の図形が作れる WEB アプリを開発し、この WEB アプリを使って札幌市内の小中学校で授業を実施しています。また、その成果をこれまでに札幌国際芸術祭 2024、札幌国際芸術祭プレイベント（2025）において発表してきました。体験した生徒や先生からは「プログラムってすごい楽しかったなって思いました！」「子ども達のプログラミングに対する興味関心が存分に引き出せた授業だったと思います。」といったコメントが寄せられています。これらの一連の活動は第 18 回キッズデザイン賞を受賞しました。



細谷 多聞

教授 デザイン学部（人間情報デザインコース）

HOSOYA Tamon

キーワード：あそび場のデザイン、インタラクション、
空気膜構造、こどもの発達、自然界の原理

空気膜構造を使った子どものためのあそび場の研究

【研究の概要】

自然現象の中に見出すことのできる「原理」を使った子どものためのあそびの研究を行っている。2024 年度はこの中の「空気圧」に注目し、我々の日常にある空気に見出すことのできる原理・効果を予測し、あそびに展開する実証型研究に取り組んだ。おぼけの「ぴーぷーぼわ」は長い袋状の透明ビニールでできた構造体であり、内部に空気が送風されて常に膨らんでいる。末端には空気笛が取り付けられており、押しついたり圧迫することで音が出るように作られている。この構造体を折り重なるように 7 本ほどあそび場に配置し、子どもたちが乗りこえたりくぐったり、身を預けて乗ったりすることができるようにした。こども達のあそびからは、次々と空気に関わる原理を発見し、それをあそびに発展させる様子が観察できた。



三谷 篤史

教授 デザイン学部（人間情報デザインコース）

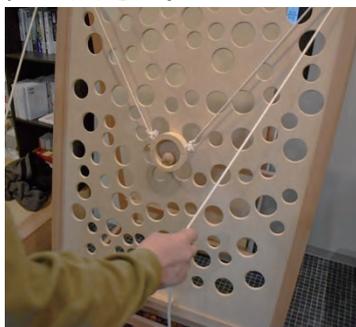
MITANI Atsushi

キーワード：メカトロニクス、センシング、ロボティクス、シミュレータ開発、インタラクション

ヨーロッパの遊具を元にした木製玩具「ユールボード」の開発

【研究の概要】

「ユールボード」はヨーロッパの“チーズボード”と呼ばれる遊具を元にした木製遊具です。複数の穴が開けられたボードの上で、2本のひもにつなげられた駒を操作し、駒の中にあるボールを目的の穴まで運びます。これまでに、遊具としての特性を追求した「アートモデル」などいくつかのモデルを開発し、いろいろなイベントでもプレイを行ってきました。そういった中で、遊具で遊ぶことによるリハビリテーション的要素についてのご指摘をいただくことが多くなり、現在は「医療チャレンジ」を行っています。今後も学内外のイベントで展示を行う予定ですので、機会があれば是非触ってみてください。



金 秀敬

准教授 デザイン学部（人間情報デザインコース）

KIM SuKyoung

キーワード：エモーション(Emotions)、マルチモダリティ(Multimodality)、エクスペリエンス(Experience)

課題展開力の構成要素と自己効力感に関する異分野比較研究 ：イマーシブ技術・AI活用教育モデル設計への基盤的考察

【研究の概要】

現代社会ではデジタル技術の進化により、社会や仕事の在り方が急速に変化しています。その中で、あらかじめ決めた方法に固執せず、状況に応じて柔軟に課題を捉え直し、解決していく「課題展開力」の重要性が高まっています。特に医療やデザインなど異なる分野の人々が協働する場では、専門的な思考や課題への姿勢、自信（自己効力感）の違いが、チームの働き方や成果に大きく影響することが分かってきました。

本研究では、看護学とデザイン学の学生を対象に、課題へのアプローチや態度の違いに注目し、「明確さ」「他者や現実との関連性」「目的意識」といった課題展開力の要素と自己効力感との関係进行分析しました。さらに、こうした違いがチーム全体の力にどう影響するかを明らかにし、将来的にはVRやAIなどの先端技術を活用した新たな教育モデルの設計へとつなげることを目指しています。



図 専門領域間における思考の深層構造の違いを示す可視化事例（左：デザイン、右：看護）

福田 大年

准教授 デザイン学部（人間情報デザインコース）

FUKUDA Hirotooshi

キーワード：見立て観察、創造性教育、協働的な学び

まちなか動物園：身の回りの見立て観察から立ち上がる創造性

【研究の概要】

私は、見立て観察によってデザイン初学者の創造性向上を目指す「まちなか動物園」を2019年に開発し、継続発展させてきました。まちなか動物園は、身の回りの風景から動物を見立てて採集する「見立て観察」と、観察結果を他の参加者らと見せ合って互いの視点の違いを協働的に学び合う「対話鑑賞会」がセットの創造性教育プログラムです。過去3年間（2021、2022、2023年度）に参加した学生らが採集した「見立て動物」を分析した結果、まちなか動物園は、見立て観察と対話鑑賞会の繰り返しによって、学生らの既知の見方・考え方を変化させ、いつでもどこでもアイデアを生成する思考と態度を醸成する手法になり得ることが分かってきました。今後は改良を繰り返し、市民向けワークショップに展開することも検討していきます。



図 「見立て動物」と「対話鑑賞会」の例

横溝 賢

准教授 デザイン学部（人間情報デザインコース）

YOKOMIZO Ken

キーワード：社会実践のデザイン、中動態、自立共生

経験を語らうことから現れる〈共創する時空〉 - ランプリングデザイン運動が喚び起こすトポフィリア（場所愛） -

【研究の概要】

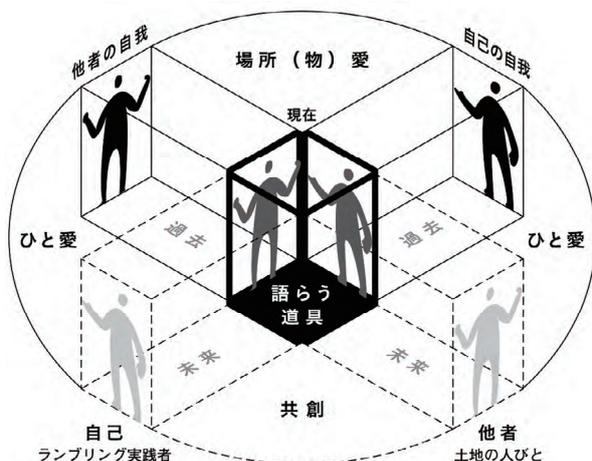
私たちは、自分の思い出を誰かに語るとき、その人の記憶や想いも一緒に語り出され、思いがけない共感やつながりが生まれることがあります。

本研究では、ある土地を歩いて見つけた小さな発見を「語らう道具」として表現し、それを地域の方と共有する「ランプリングデザイン運動」を実践しました。

石山緑地や砂川市などでの試みを通じて、自分の経験を語り、相手の記憶を引き出しあうことで、世代や立場を越えた〈共創する時空〉が現れることがわかりました。

このような出会いが、地域への愛着や新たな活動の芽となることを、本研究は明らかにしています（図参照）。

[第7回共創学会年次大会予稿集 2023 より]



大淵 一博

講師 デザイン学部（人間情報デザインコース）

OHBUCHI Kazuhiro

キーワード：地域貢献、産学官連携、学生参加

南区役所との授業協力から発展した地域貢献

【研究の概要】

本学は地域貢献を使命の1つとし、教職員・学生が一体となって様々な形で地域と関わりを持っています。2024年度は以下のような取り組みを通して、地域に貢献しました。

2年次前期開講のデザイン総合実習Ⅰでは、南区地域振興課の職員のみなさまに授業に参加いただきました。「南区のブランディング」をテーマとしたこの授業では、最初に学生が職員の方々にヒアリングをして、南区に対する理解を深め授業課題に取り組みました。課題で制作したものの中から、職員の審査を経て、南区の啓発品をデザインしました。この啓発品は、今後の南区のイベント等で、市民の皆様へ無料で配布される予定です。また、南区内各地で開催されている冬のイベント「南区冬の雪あかり2025」を告知するチラシや、広報さっぽろ南区版ページのヘッダデザインを手掛けました。これらの事業を通じて、「芸術という切り口で南区をPRする」という南区の活動趣旨のもと、デザイン・アートのつながりを市民の皆様へ伝えていくことができたと思います。

学生が授業課題をこなすだけでなく、学外の方々との取り組みにも参加することで、多くの社会経験を積むことができるという教育的な効果も得られています。



松永 康佑

講師 デザイン学部（人間情報デザインコース）

MATSUNAGA Kosuke

キーワード：平面充填、タイル張り、円弧、Truchet、意匠

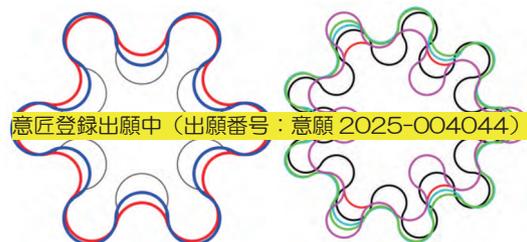
円弧を用いた平面充填図形に関する研究

【研究の概要】

本研究は、正多角形を用いた正タイル張り3種および準正タイル張り8種において、各頂点を中心に隣接辺の中点を通る円弧を描くことで、滑らかに接続するパターンを平面に形成する手法を提案するものである。これにより、曲線で構成されたTruchetタイルを用いた新しい平面充填図形の探索と応用が可能となる。提案手法では、規則性を保った配置により、円弧同士が連続して繋がることで、パズルピースや装飾模様として活用できる形状を生成できる。

特に本研究では、9つの突起を持つ図形5種および6つの突起を持つ図形3種を作成し、それぞれの形状や構造の違いを比較した。図形はすべて平面充填が可能であり、それぞれ異なる外形寸法を有する。また、一部の図形は複数の構成要素をまとめた集合体としても充填が可能であり、より複雑な模様生成に寄与する。

図形の生成には、円弧によるTruchetタイルを準正タイル張りに適用し、滑らかな円弧で構成された新しい図形を導出し、意匠申請した。類似した突起数を持つ形状間での微細な構造差を視覚的に示すことができた。



梶田 聡志

助教 デザイン学部（人間情報デザインコース）

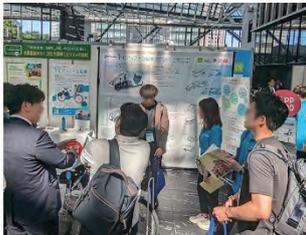
MASUDA Satoshi

キーワード：プロダクトデザイン、3DCAD、Rapid Prototyping、ユニバーサルデザイン、エルゴノミクス

水素アシスト型ペロタクシー「PIONIE」のデザイン開発・展示

【研究の概要】

札幌市で運用されているペロタクシーの「水素アシスト」型車両の試作において、人間中心設計に基づいた外観デザインのコンセプト立案・監修を担当した。乗客や運転手をはじめ、当モビリティを利用する様々な「人」の視点に立ったデザインを提案。また「水素」のもたらず価値を、視覚的に表現すべく様々なデザインアイデアを盛り込んだ。BICYCLE-E・MOBILITY CITY EXPO 2024（東京）、環境広場さっぽろ2024（札幌）といった展示会へ出展の機会を得て、多くのモビリティファン・市民の声を集め、デザインブラッシュアップに反映させている。



矢久保 空遥

助教 デザイン学部（人間情報デザインコース）

YAKUBO Takanobu

キーワード：感性、共感覚的比喩、クロスモダリティ、インタフェースデザイン

共感覚的比喩に着目した感性発現メカニズムの研究

【研究の概要】

私たちの研究室では、「柔らかさ」や「心地よさ」といった人間の感性がどのようにして生まれ、どのように評価されるのかを科学的に解明することを目的としています。

特に、視覚や触覚、聴覚といった複数の感覚（マルチモーダル刺激）がどのように組み合わせたり、人がものの印象を受け取るのかに着目しています。たとえば、柔らかい色や音色を感じる時に、「ふわふわした音」や「やさしい色」といった共感覚的な比喩を使うことがあります。これは「通様相性」と呼ばれる現象で、異なる感覚が互いに関連づけられていることを示しています。

こうした感性の発現メカニズムを解明するために、私たちは感性評価実験を行い、その際にMEG（脳磁図）という脳活動を測定する装置を用いて、感性が脳内でどのように処理されるかを調べています。これにより、感性の科学的な理解が進むだけでなく、製品デザインやユーザーインターフェースの改善にもつながる知見を提供しています。



吉田 彩乃

助教 デザイン学部（人間情報デザインコース）

YOSHIDA Ayano

キーワード：可視化、画像認識、IT 活用

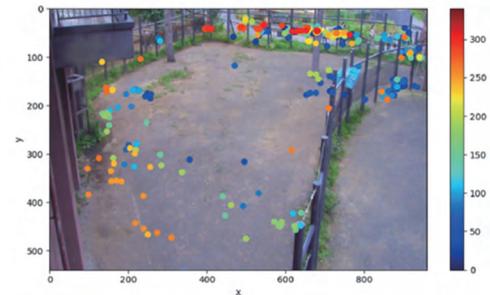
IT を活用した地域の課題解決や分析

【研究の概要】

IT を活用して人々の生活における課題解決や、従来は人の手で行っていた分析に対し、画像処理・画像認識などを活用し、分析から可視化までのプロセスの自動化に取り組んでいます。

例えば、最近話題となっている乗合タクシーでは、知らない人同士が乗った時の気まずさが課題となっています。そこで、乗合タクシーの後部座席に車両の位置情報に応じて地域の歴史やイベント情報などを提示するモニターを実装・設置して、その気まずさが低減されるか調べました。

また、別の研究では、円山動物園のキリン舎を対象に設置されているキリンの観察用定点カメラの録画映像を使用し、機械学習によって、野外放飼エリアにおけるキリンの軌跡等を調べました。目視による行動分析の結果と比較したところ、同様の傾向を示す結果となっていたことから、分析を自動化しても問題ないと考えられます。



渡部 大志

助教 デザイン学部（人間情報デザインコース）

WATANABE Hiroshi

キーワード：自己組織化、最適化、機能分化、複雑系、機械学習

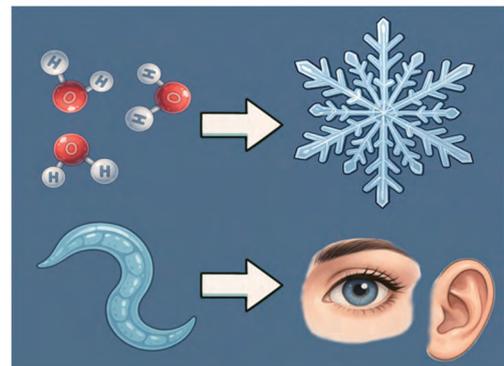
最適化によって現れる構造を探る

【研究の概要】

本学のシンボルのモチーフにもなっている雪の結晶。全体の設計図もクッキーのような型もないのに水が自発的に複雑な形の氷になるのは本当に驚かされます。雪の結晶は私たちの視点では小さいですが一つ一つの水分子から見れば巨大な構造物になります。雪の結晶のように小さな要素同士のルールによって大きな構造が生まれる事を自己組織化と呼びます。

一方、生物は環境に適應する過程で様々な器官、例えば目や耳や手足などを獲得してきました。生物もあらかじめ現在の姿になることが決まっていたわけではなく、自発的に構造を得たという意味では自己組織化の一種とも言えます。ただし、雪の結晶が小さな要素のルールから大きな構造を作ったのとは反対に、生物は個体という大きな要素が環境に適應するというルールを経て、器官という小さな構造をつくります。

私は主に後者の自己組織化において「あるルールによってどんな構造ができるのか？」逆に「ある構造を生み出すルールはなんだろうか？」を問う研究をしています。この研究により新しい軽くて丈夫なデザインや、人々が住みやすい街の設計などに貢献できることを期待しています。



松井 美穂

教授 デザイン学部（共通教育）

MATSUI Miho

キーワード：アメリカ南部文学、人種、ジェンダー・セクシュアリティ、モダニズム

アメリカ南部文学研究



【研究の概要】

アメリカ南部文学、特に南部ルネサンス期(1920~50年代)の文学を中心に研究しています。作家としては、ノーベル賞作家でもあるウィリアム・フォークナー、女性作家ユードラ・ウェルティ、カーソン・マッカーズなどを研究しています。南部社会は家父長制と人種差別を基盤とした社会であり、人種、ジェンダー、セクシュアリティといった要素が社会システム自体のみならず、その社会の個々人のアイデンティティと深く関わっています。そのような歴史的・社会的・文化的背景をもった南部作家がどのように「南部とは何か」ということを、その文学的営為において探求したのかを考察することが研究の目的です。(写真はミシシッピ州オックスフォードにあるフォークナーの自宅。Rowan Oak と名付けられ、現在はミシシッピ大学が管理している。筆者撮影)

また、白人作家のみならず、黒人作家の研究も行っています。昨年は、黒人女性作家ゾラ・ニール・ハーストンについて考察しました。彼女の小説は、人種問題からもフェミニズムの観点からも注目すべき作品です。アメリカ文学の全体像をより良く知るためには、やはり、様々な人種をバックグラウンドに持つ作品を読むことが大事だと考えます。

丸山 洋平

准教授 デザイン学部（共通教育）

MARUYAMA Yohei

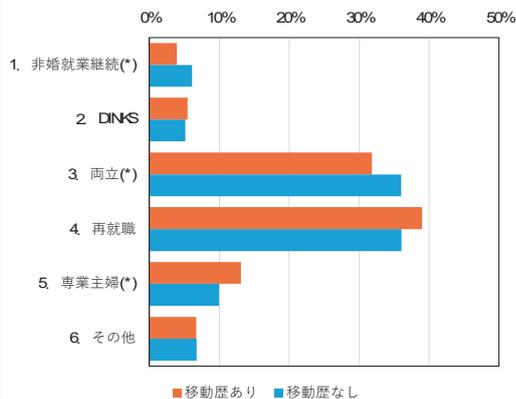
キーワード：人口移動、初婚行動、家族形成規範、ライフコース

移動経験と家族形成に対する考えとの関係

【研究の概要】

人口移動経験と家族形成との関係についての研究蓄積があり、我が国では非大都市圏から大都市圏（特に東京圏）への移動者の低出生率、高未婚率、高シングル率が報告されている。本研究では、こうした状況を生じさせる理由を明らかにするべく、国立社会保障・人口問題研究所による第15

独身男性が期待するパートナー女性のライフコース



回出生動向基本調査を用いて、出身地と現住地との組み合わせから県間移動歴を把握することで、移動歴による家族形成規範意識の差異を探索的に分析する。独身者調査では以下の点が明らかになっている。まず、移動歴あり群の方が男女ともに収入・学歴が高く、家族形成に対する伝統的な考えを支持しない傾向が見られた。しかし、部分的には移動歴あり群の方が伝統的な考えを支持する傾向を見せる場合があり、例えば移動歴あり独身男性が、パートナーに対する専業主婦化希望を強く持っている等の面で表出している(左図)。移動歴あり群が高学歴であることと合わせると、高学歴者間での家族形成規範意識のミスマッチが起こるため、成婚に至らないのではないかと仮説が導出されている。

並木 翔太郎

准教授 デザイン学部（共通教育）

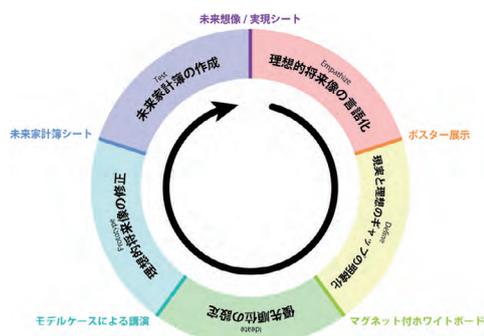
NAMIKI Shotaro

キーワード：ライフデザイン思考、自己理解、
ワークショップデザイン、キャリア教育

ライフデザイン思考導入ワークショップの開発

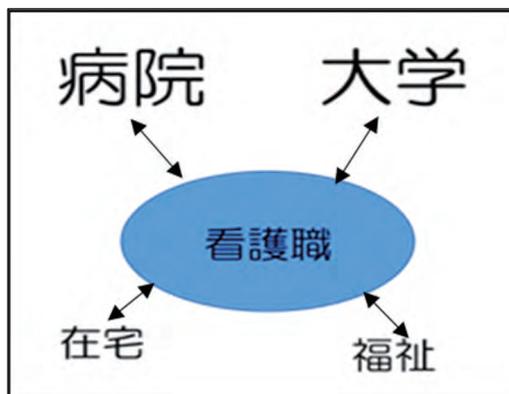
【研究の概要】

この研究では、大学生を主たる対象とし、パーソナルファイナンスの視点から、自身の35歳における「なりたい未来のワタシ」に必要な年収を算出することを通して、金融リテラシーの向上と自己理解の促進を可能にするワークショップを開発しています（本研究はCOI-NEXT（代表機関：北海道大学）の一環として、矢久保空遥助教および石井雅博教授とともに行っています）。将来的な支出とキャリア志向生に関するアンケート調査をワークショップ前後で行ったところ、全30項目のうち19項目において、有意水準5%で有意差が認められました。

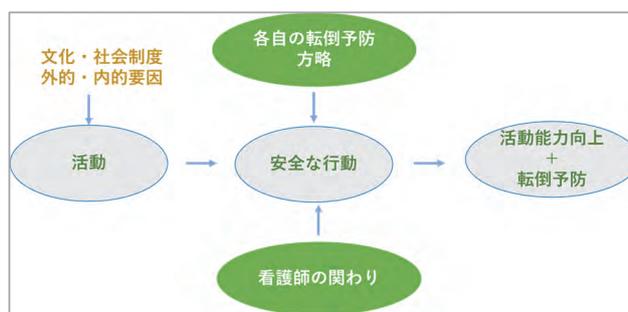


2. 看護学部

<p>樋之津 淳子 教授 看護学部（基礎看護学領域）</p> <p>HINOTSU Atsuko キーワード：継続教育、看護コンソーシアム、看護技術</p>
<p>大学と医療施設の協働による看護師の遠隔会議システムを用いた 継続教育の効果</p>
<p>【研究の概要】</p> <p>看護系大学と医療施設が連携・協働して看護専門職者の人材育成やキャリア支援を行う共同体である、看護コンソーシアム活動に取り組んでいる。看護師が基礎教育を終えた後、さらにステップアップするために必要な研修を個々の所属施設で行うのではなく、大学の持つ人的、物理的リソースと複数の医療・福祉施設の連携・協働による横断的な取り組みが必要であると考えている。すべての研修はZoomを用いた遠隔会議システムで実施した。遠隔研修への参加者は回を重ねていく中で双方向性のディスカッションがスムーズとなり、遠隔研修であっても研修効果が非常に高く、満足度も高いことがわかった。2025年度からは履修証明制度を導入に向けて鋭意準備中であり、研修のさらなる充実を図っていく。</p>



<p>檜山 明子 教授 看護学部（基礎看護学領域）</p> <p>HIYAMA Akiko キーワード：転倒予防、リスクアセスメント、医療安全</p>
<p>医療施設での転倒予防看護と地域在住高齢者の転倒予防方略</p>
<p>【研究の概要】</p> <p>ヒトは二足歩行であるため、転倒は日常的に発生します。すべての転倒が問題になるわけではありませんが、転倒は傷害を引き起こすため、人々は、転倒しないこと、あるいは転倒してもけがをしないことを望みます。一方で、活動能力の維持向上の必要性は自明ですが、活動性が高まれば、転倒リスクも高まります。転倒予防は相反する側面を持っているので、予防が困難であるという現状があります。</p> <p>私は転倒予防のための看護技術を検討するために、認知行動の視点、運動力学的視点で転倒要因に関する検証を重ねています。転倒は、高齢者に限らず発生しますが、発生するまでの要因やプロセスは、年齢によって特徴があることがこれまでの研究からわかりました。私は、これらの転倒要因に関して、入院患者・地域在住高齢者を対象とした研究を重ねています。さらに、高齢者がもつ転倒予防行動のパターン化に取り組み、その強みを生かしながら看護師の転倒予防技術の確立を目指しています。</p>



武富 貴久子 准教授 看護学部（基礎看護学領域）

TAKETOMI Kikuko キーワード：継続教育、看護コンソーシアム、リスキリング

看護師の経験を紡ぐリスキリング

-学びあう場としての看護コンソーシアムにおける研修モデルの検証-

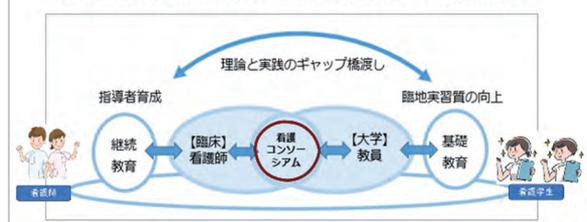
【研究の概要】

大学と医療施設の連携と協働による看護人材育成を目的とした看護コンソーシアムでは、地域の看護師が学びあう場となる形での研修を提供しています。一般的に研修等の学習機会は都市部に集約されているため、広域におよぶ北海道の地域課題である距離的な制約はオンライン研修という形で対応しています。

また、看護コンソーシアムの研修形態は、専門職の研修の形としての短時間で単発の座学研修ではなく、研修に参加した看護師がそれぞれの課題を職場に持ちかえり、実践したうえで振り返る形を基本としています。これらの研修の形は、専門職者としてのキャリアアップやスキルアップに、どのような学習効果があるのか、経験学習理論の観点から検証を進めていく予定です。



・大学と病院が連携する循環的・継続的な人材育成のシステム



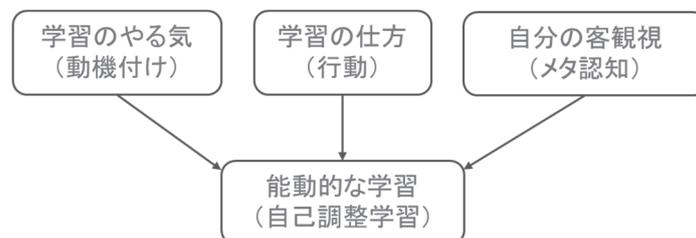
中平 紗貴子 講師 看護学部（基礎看護学領域）

NAKAHIRA Sakiko キーワード：自己調整学習、看護教育、看護技術

自己調整学習に関する研究

【研究の概要】

自ら学習に取り組むとはどういうことなのか。私は看護学生が知識や技術を学修する過程で、能動的で自律的な学修となるように検討したいと考えています。学修が自分で行える場合は良いのですが、やる気があってもやり方が分からない、そもそもやる気が起きない、自分の学修状況を客観的に見れないなど、様々な課題が見られる場合があります。そこで私は自己調整学習という考え方を学修に活用したいと考えています。自己調整学習とは、学習のやる気、学習の仕方、自分を客観的に見ることを通して、学習者が自分の学習プロセスに能動的に関わることです。私はこの自己調整学習という考え方を活用し、特に看護技術の修得過程において、看護学生が学び方を学べるような仕組みを作りたいと考えています。



三戸部 純子

講師 看護学部（基礎看護学領域）

MITOBE Junko

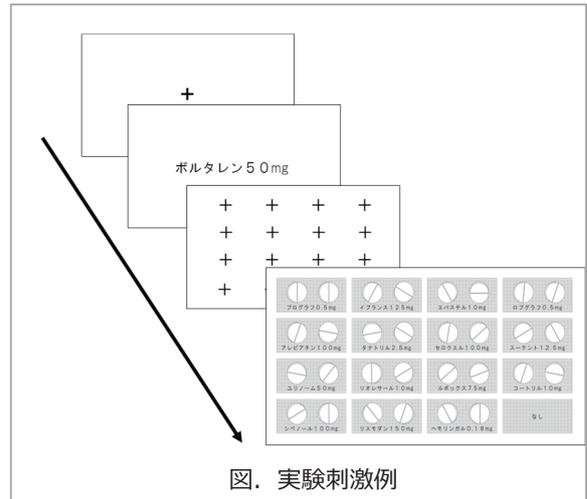
キーワード：ヒューマンエラー、医療安全、看護教育、
認知心理学

薬剤情報の識別エラーについての実験的検討

【研究の概要】

医療現場において、薬剤の取り違いや投与量の間違いといったエラーは、患者へ重大な影響を及ぼす恐れがあります。特に入院患者に対しては、看護師が直接薬剤を投与する場面が多く、エラー防止が重要となります。類似する薬剤名がエラーの要因となることはこれまでの様々な研究で明らかとなっています。しかし薬剤名だけでなく、数字と単位で構成される薬剤量や、1日何回何錠投与するかといった、他の薬剤情報について、なぜ見間違いや見逃しが生じるかといった点についてはあまり解明されていません。

本研究では、パソコン上に薬剤名と薬剤量を組み合わせた表記を提示し、それを選択肢の中から選ぶという実験で見間違いや見逃しの起こりやすい状況を検証しています。また、実験中に視線の動きも計測し、エラーと視線の関係も調べています。



本多 いづみ

助教 看護学部（基礎看護学領域）

HONDA Izumi

キーワード：口腔・鼻腔吸引、苦痛軽減、看護技術、熟練看護師

患者の苦痛を軽減する看護技術

【研究の概要】

看護技術は、どのような技術であっても安全性と安楽性を考慮して実施することが重要です。気道吸引技術は、生命維持や呼吸困難の軽減を図るために行いますが、患者に苦痛を伴います。安全性を確保する技術については明らかになっていますので、安楽性として苦痛を最小にする方法を明らかにしたいと考えました。

そこで、気道吸引の経験が豊富な看護師の技術を観察し、どのような工夫を行っているのかインタビューを行いました。その結果、看護師は患者の気持ちに共感することで、どのような苦痛が生じるのかを推測していました。患者への接し方、吸引時間を短くする方法、カテーテル挿入方法などを工夫し、合併症を起こさない対策を実施していることが明らかになりました。今後も、患者の安全・安楽を目指した看護技術の確立に向け、研究を重ねていきたいと考えています。



吉田 実和

助教 看護学部（基礎看護学領域）

YOSHIDA Miwa

キーワード：血圧測定、看護学生、看護技術

血圧測定技術に関する研究

【研究の概要】

血圧測定は患者さんの健康状態を把握するために重要で、高い頻度で行う看護技術です。看護学生にとっては、入学して早期に教育を受ける技術となっています。

しかし、血圧測定技術は、腕帯を適切な強さで巻くことや、聴診器をあてて血管音を聴取しながら血圧計のねじを細かく操作し、血圧値を示す目盛りを読み取るという動作を同時に行うことから、初学者にとっては習得が難しい技術となっています。

看護学生を対象に、減圧計測機能がついた血圧測定教材システムを用いて調査したところ、巧緻性に関する技術項目ができていると減圧速度のばらつきが小さいことがわかりました。看護学生が血圧測定技術を習得するために効果的な教育方法はどのようなものか、また、血圧測定技術を習得するためには、どのように教授したらよいかなどに関心を持ち、現在は基礎的研究に取り組んでいます。



松野 千代美

教授 看護学部（看護管理学領域）

MATSUNO Chiyomi

キーワード：急性心筋梗塞、再発予防、セルフケア行動、アプリケーション開発

急性心筋梗塞発症後患者のセルフケア行動評価アプリケーションの開発

【研究の概要】

急性心筋梗塞は、生活習慣病の代表的な病気です。心臓に血液を送る“冠動脈”が閉塞し心臓の筋肉に異常が起き、突然胸や背中などの激しい痛み、息苦しさを感ずる病気です。症状が現れてから迅速に治療することにより、死亡する方は少なくなっています。しかし、3割から4割の方は再発する可能性があると言われていています。

医師や看護師は、再発を予防するために生活習慣を整え、確実に治療薬を飲むことなどを患者さんに指導します。再発予防のためには、患者さんご自身で健康を管理しながら生活するセルフケア行動が大切です。

今回、事前に作成した再発予防のためのセルフケア行動評価表をより多くの方にご使用いただけるよう、継続研究を行い、患者さんと医師の診療をつなぐ、アプリケーションの開発を計画しています。

アプリの実用により生活管理行動、受領管理行動、血圧管理行動の評価と診療の連携により、生活習慣の改善と再発予防に寄与できることを目指しています。



奈良間 美保

教授 看護学部（小児看護学領域）

NARAMA Miho

キーワード：小児看護学、小児在宅ケア、子どもと家族主体のケア、相互主体性、育児ストレス

「こどもの感覚」を実感する体験でつながる医療的ケア児の家族と看護師の関係性に関する研究

【研究の概要】

医学の進歩等によって重い障がいのあるこどもの命は救われるようになり、呼吸や栄養などを医療的ケアで補いながら発達していくこどもは増加傾向にあります。医療的ケアに多くの時間やエネルギーを注ぐ家族には、負担を軽減する支援が行われるようになりましたが、家族が親であることやきょうだいであることを実感しながら生き生きと主体的に生きるためのケアの開発はまだ十分に行われていません。

そこで、医療的ケアを必要とするこどもの家族へのインタビューを行い、喜びや嬉しさ、辛さなどの「こどもの感覚」をどのように実感しているのかを明らかにすることに取り組んでいます。これにより、障がいや病気のあるこどもと親が互いに相手の感覚を共有することにどのような意味があるかを見出したいと考えています。

また、家族と「こどもの感覚」を共有した経験のある看護師によるエピソード記述を通して、障がいや病気のあるこどもはもちろんのこと、心の葛藤や社会生活に悩みを抱える親子の支援のあり方を見出し社会全体で健やかなこどもの育ちを支える手がかりを得たいと考えています。



「こどもの感覚」を共有する

加藤 依子

准教授 看護学部（小児看護学領域）

KATO Yoriko

キーワード：食物アレルギー、体調管理アプリケーション、ヘルスコミュニケーション、Patient and Public Involvement

食物アレルギーのあるこどもと家族の Well being を支えるための包括的な支援について Patient and Public Involvement の観点から検討をしています

【研究の概要】

食物アレルギーは、乳幼児期に多く、食事療法とアレルギー症状への対処のほか、周囲の人々への協力要請等の疾患管理が必要とされる疾患です。食物アレルギーの患者教育は、個別性が高く、小児一般外来診療と比較して、FA の外来診療の初診に 5 倍、再診に 1.5~3 倍の時間を要することがわかっています（岡藤,2020）。

患者家族 - 医療者間のコミュニケーションは、診療の内容だけでなく、患者家族の価値観や思いについても共有していくことが前提となります。患者家族 - 医療者間のコミュニケーションが円滑であると、患者満足や治療のアドヒアランス、生活の質の向上に好影響します。

医療におけるコミュニケーションは、Disease（疾病）に着目する医療者と、社会心理的側面を含めた生活のなかの Illness(病い)として問題をとらえる患者家族との視点の違いという特殊性があります。

こうした特殊性を踏まえ、Patient and Public Involvement(PPI)の観点から、体調管理アプリケーションの開発と評価を行い、食物アレルギーのあるこどもと家族の Well being を支えるための包括的な支援を検討しています。PPI：患者やその家族・市民の方々の経験や知見・想いを積極的に将来の治療やケアの研究開発、医療の運営などのために活かしていこうとする取り組みのこと。

対面コミュニケーション



非対面コミュニケーション



牧田 靖子

講師 看護学部（小児看護学領域）

MAKITA Yasuko

キーワード：窒息、乳幼児、事故予防対策

乳幼児の「窒息・誤飲」事故の実態と事故予防対策

【研究の概要】

厚生労働省の統計報告では、2016年以降わが国の「不慮の事故」による子どもの死亡者数の全体数は減少傾向となっています。しかし、「不慮の事故」は14歳以下の死因順位の上位を占めており、死亡事故発生率では、乳幼児が全体の半数を占めていることが継続して報告されています。

「窒息・誤飲」事故による死亡数は、0歳児で圧倒的に多く、死亡例や重篤な後遺症を残すことにつながる場合があります。少子化の現代において、乳幼児の「窒息・誤飲」事故を減少させる取り組みは重要であると考えます。

乳幼児では、成長発達段階による興味・関心の対象の拡大、行動範囲の拡大、安全に対する意識の未熟性などによって、起こりやすい「窒息・誤飲」事故には特徴があることが報告されています。また、家庭や地域における事故予防指導、啓発等の対策も各自治体で実施されています。



しかし、「窒息・誤飲」事故の発生割合の減少は、十分とは言えないのが現状です。

私は、乳幼児の「窒息・誤飲」事故件数の減少、および、万が一「窒息・誤飲」事故が発生した場合に、重篤な後遺症が残らないようにしたいということを目指し、研究に取り組んでいます。

荒木 奈緒

教授 看護学部（母性看護学領域）

ARAKI Nao

キーワード：胎児異常、妊婦、支援体制の構築

胎児異常を診断された女性への助産師の支援

【研究の概要】

近年、産科領域において出生前診断技術が大きく前進し、様々な方法を用いて妊娠中に胎児の疾病を診断することが可能となった。妊娠中に胎児の形態異常、機能異常、染色体異常、遺伝性疾患を診断される妊婦は急速に増えることが予測され、胎児異常を診断された妊婦の支援体制の構築が急がれる。

しかし、当事者のみならず看護職の両者にコンセンサスの得られた具体的支援の方法論は未だ開発されていない。そこで本研究では、胎児異常を診断された妊婦や出産後にNICU入院となった新生児の母親と関わることの多い助産師をケアの専門家として位置づけ、専門家の同意の程度や対立する意見のすり合わせを行い、具体的支援内容のコンセンサスを形成することを目的とし調査を実施している。

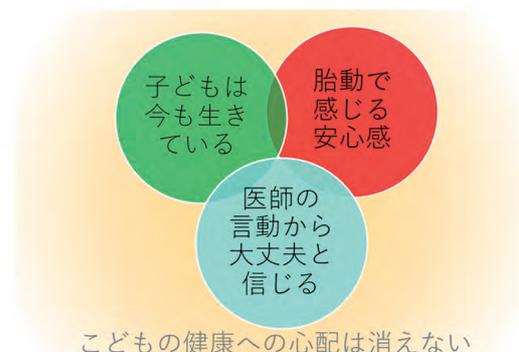


図1. 胎児異常の診断直後から出産まで続く思い

石引 かずみ

講師 看護学部（母性看護学領域）

ISHIBIKI Kazumi

キーワード：出産、女性中心のケア

出産時における Women-centered care（女性中心のケア）

【研究の概要】

女性にとって出産は、一生のうち幾度とない貴重な経験です。そして、その出産体験は、女性の産後にまで影響を与えることが報告されており、出産時のトラウマ体験が産後の精神的健康に影響を及ぼすことや、豊かな出産体験が肯定的な母親役割獲得を促す等、ポジティブな出産体験の重要性が謳われています。

そのため、女性のポジティブな出産体験は、近年社会問題となっている産後うつや子ども虐待の解決に向けた一つの糸口となる可能性があります。

世界保健機構（WHO）は、母子にとってポジティブな出産体験を得るためには、出産に携わる医療職者による「Women-centered care」が重要であることを強調しています。しかしながら、これが具体的にどのようなケアなのかについては、医療職者によって解釈が曖昧な状況です。この状況は、女性に対するケアの質にばらつきが生じることにつながります。

そこで、医療職者間で出産時における Women-centered care について共通認識を形成できるよう、「出産時における Women-centered care」とはどのようなことかを具体的に明らかにするための研究に取り組んでいます。



岡 園代

講師 看護学部（母性看護学領域）

OKA Sonoyo

キーワード：新生児看護、NICU、新生児集中ケア、母性看護認定看護師

新生児集中ケアの臨床判断と技法

【研究の概要】

長年、出生直後から医療的ケアを要する新生児の看護に携わり、研究してきました。

現在は、最も出生直後から生命の危機に遭遇している 1000g 未満の新生児（超低出生体重児）のケアについて研究を続けています。

特に、新生児のケアに熟練した看護師たちが生まれたばかりの新生児の何を見て、どのように判断し、ケアを行っているのかを明らかにしようと考えています。もちろん、医師など関係する皆さんの医療者と協働することも含まれています。

現在、日本の少子化に歯止めがかからない大変、心配な状況です。世界で最も新生児指導率の少ない日本の医療水準が継続していくためにも、言葉によって、新生児ケアの技法（技術）を明らかにしていく必要があると思っています。ベテラン看護師の判断と行動の結びつきを明らかにすることで看護師教育に活かしていくことができると考えています。プロポーションは小さいですが、一人の人として生きる権利のある新生児を人類の仲間として、家族の皆さんとともに温かく応援するチームの一員であることが基盤になっています。



小野澤 かおり 講師 看護学部（母性看護学領域）

ONozAWA Kaori キーワード：出生前検査、妊婦のケア、看護教育

出生前検査の結果による選択的人工妊娠中絶に対する看護大学生の考え

【研究の概要】

出生前検査は、お腹の赤ちゃんに疾患や障がいがないかを調べるために行われます。結果によって人工妊娠中絶が行われることについて、女性の自己決定の権利と胎児の生きる権利の両側面から、倫理的な難しさが指摘されています。

そこで「出生前検査の結果によって人工妊娠中絶を選択すること」に対して、将来のケアの担い手である看護学生がどのような考えを持っているかを、自由記述式アンケートで調査しました。（A大学の看護学生 99 名に研究協力を依頼、58 名が回答、57 名分のデータを研究者 4 名で分析）

その結果、看護学生は出生前検査の結果による選択的人工妊娠中絶について、「検査の結果で中絶を選択することは正解でも不正解でもなく難しい」、「障がいを理由に中絶が行われることを受け入れられない」、「どのような選択であれ本人の決断として受け止める」、「障がいのある子どもは育てられないと考える場合の手段」、「自分であれば中絶を選択する」、「障がいをもって生まれることは子どもの人生に負の影響を与えかねない」の6つの考えを持つことが明らかになりました。

これらの結果から、看護学生が検査の結果に伴う妊婦の決断の難しさを想像したり、検査で障がいがあったことで胎児の命が失われることに悲しみを感じる一方、女性の中絶の選択にも理解を示していることがうかがえます。こういった学習者の視点を看護教育に生かすことが重要と考えています。



久保田 祥子 講師 看護学部（母性看護学領域）

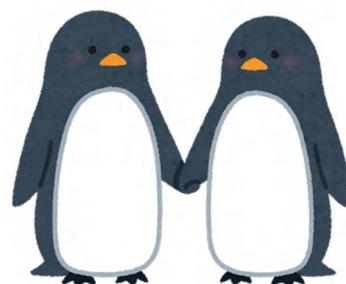
KUBOTA Shoko キーワード：性的同意、性暴力予防、性教育

日本における「Sexual Compliance」の実態把握

【研究の概要】

私は、日本において人々が「性的同意」についてどう考え実践しているのか、その考えや実践に関連する物は何かを調べ、性暴力を予防するための教育に役立てたいと考えています。性的同意と言っても、言葉のことなのか、行動のことなのか、心の動きのことなのか、など、色々な角度から考える必要があります。その手掛かりとして、私が現在注目しているのが「Sexual Compliance（迎合的な性行為）」という概念です。これは、「本心では望んでいないのに、性的な行為を自ら進んで行うこと」を指します。内心とは裏腹に、いわゆる「性的同意がある」ように見える状態と言えます。欧米では、そのような行為を経験したことのある人が2割～6割ほどいることや、精神的な不調と関連することなどが研究によって分かっています。

日本では Sexual compliance に関する研究はほぼ無く、どのぐらいの人が経験しているのか、なぜそのような行為をするのか、その結果どういった影響があるのかなど、その実態は学術的には明らかにされていません。そのため、今後インタビューやアンケートなどを通して実態を把握し、それを元に性的同意の望ましいあり方を考え、性暴力予防や、その教育につなげていきたいと考えています。



寺林 加菜子

助教 看護学部（母性看護学領域）

TERABAYASHI Kanako キーワード：無痛分娩、産後の疲労感、縦断研究

無痛分娩と非無痛分娩における産後の疲労感の比較 —初産婦の産後4ヶ月までの縦断研究—

【研究の概要】

近年、出産方法として無痛分娩が選択肢の一つとなっています。しかし、無痛分娩は分娩中や分娩直後の痛みやストレスを軽減できることが明らかとなっていますが、その後の産後生活にどのような影響をもたらすのかはまだ十分に明らかになっていません。そこで、産後の疲労感に着目し、無痛分娩と自然分娩とで疲労感は異なるのか調査をしました。

第1子を出産した産婦さん60名（無痛分娩で出産した31名と自然分娩で出産した29名）を対象に、出産後5日目、産後1か月、産後4か月の3時点で、産後の疲労感を測定できるアンケートを使用して統計的に比較をしました。

その結果、無痛分娩も自然分娩も産後5日目から産後4か月までの疲労感に差がないことがわかりました。しかし、サンプルサイズが小さく、この結果はまだ十分な根拠になるとは言えないと考えています。引き続き、妊産婦さんとその家族が、出産に対する正しい情報提供を受け、自分に合った出産方法の選択を行い、満足な出産体験を経て、育児がスタートできるような支援を考え、研究に取り組んでいきたいです。



卯野木 健

教授 看護学部（成人看護学領域）

UNOKI Takeshi

キーワード：ICU、PICS、メンタルヘルス

ICU 退院後 4 年間の長期メンタルヘルス経過

【研究の概要】

集中治療室（ICU）を退院した人たちの心の健康は、その後どうなっていくのでしょうか？本研究では、ICU を退院してから4年間の間に、不安・うつ・心的外傷後ストレス障害（PTSD）といったメンタルヘルスの変化を追いました。全国7つの病院で223人の元ICU患者にアンケートを行ったところ、うつ症状は1年後の約25%から4年後には約33%に増加していました。不安も増加傾向にありましたが、PTSDはやや減少していました。また、心の症状の変化にはいくつかのパターンがあり、人によって改善したり、悪化したり、安定していたりと様々でした。特に学歴が高い人ほど重い症状になりにくい傾向があることがわかりました。この研究からは、ICU退院後も長く心のケアが必要であること、そして人それぞれに合ったサポートが大切であることが明らかになりました。



川村 三希子

教授 看護学部（成人看護学領域）

KAWAMURA Mikiko

キーワード：認知症高齢がん患者、シミュレーション教育、疼痛
マネジメント、がんサバイバー、ヘルスリテラシー

- ① 「認知症高齢がん患者の痛みのマネジメントに対するシミュレーション教育プログラムの開発
- ② がんサバイバーのヘルスリテラシーに関する研究

【研究の概要】

- ① 認知症を伴う高齢がん患者さんに対する看護師の疼痛マネジメントの実践力を高めるためにシミュレーション教材（写真はその一部）を用いた教育プログラムを開発し教材を洗練させ介入研究を行なっています。



- ② ヘルスリテラシーとは、健康や医療に関する情報を探し、理解し、評価し、活用する力のことを指します。外見の変化を体験したがんサバイバー（体験者）のヘルスリテラシー（HL）に関するアンメットニーズ、HLの実態を明らかにしました。HLのアンメットニーズは、情報がみつけにくい、外見の変化は、嗜好性の高い情報がゆえに“人それぞれだから”と処理され、適切な情報が提供されず、自分の欲しい情報にたどり着けないことが明らかになりました。

菅原 美樹

教授 看護学部（成人看護学領域）

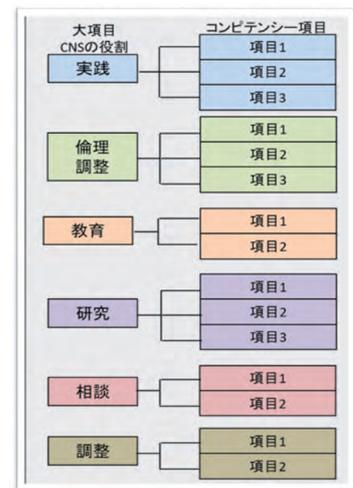
SUGAWARA Miki

キーワード：専門看護師、救急外来看護師、コンピテンシー、
看護実践、評価指標

- ① 二次救急医療機関の救急外来看護師のコンピテンシー評価指標の開発
- ② クリティカルケア看護専門看護師の直接ケアコンピテンシーに関する研究

【研究の概要】

- ① 二次救急医療機関は、わが国の救急医療の重要な役割を担い、24時間 365日、地域で発生する救急患者の初期診療と必要に応じて入院治療を行っています。二次救急医療機関の診療体制を充実させる方略のひとつとして、救急外来を担当する看護師の能力育成が重要となるため、急な怪我や急病で外来受診する患者に対応する看護師に必要とされるコンピテンシー（能力）を明らかにした評価指標を作る研究に取り組んでいます。
- ② 救急・重症患者とその家族を対象に専門性の高い看護を提供するクリティカルケア看護専門看護師の直接ケアコンピテンシーに関する研究にも取り組んでいます。修正デルファイ法により 62 項目の直接ケアコンピテンシーを明らかにしました。今後は、開発した評価指標を大学院教育で活用し、さらに評価指標の難易度を検討していきたいと考えています。



<p>高橋 奈美 TAKAHASHI Nami</p>	<p>准教授 看護学部（成人看護学領域） キーワード：慢性看護学、難病看護、家族看護、看護実践、多職種連携</p>
<p>筋萎縮性側索硬化症患者とその家族への支援</p>	
<p>【研究の概要】 私は、筋萎縮性側索硬化症（Amyotrophic lateral sclerosis；以下、ALS）患者さんが、生活と折り合いをつけながら、病気や症状にうまく対処できるための支援や ALS 患者さんの持てる力を引き出すことができるような新たなケアの創出を目指した研究に取り組んでいます。</p> <p>ALS は、原因不明の進行性の神経難病であり、進行の速さは人によって異なるため、病気の進行の見通しを持つことが難しい疾患です。加えて、呼吸障害については、胃ろう造設や人工呼吸器装着時期に影響しますが、患者さんの自覚症状と検査結果の客観的情報との間にズレが生じることがあるため治療の選択の難しさがあります。</p> <p>そのため、疾患のみに焦点を当てた支援ではなく、患者さんご自身が病気をもちながらどのような体験をされているのかに焦点を当てた支援が重要です。</p> <p>ALS 患者さんとそのご家族が、住み慣れた地域で自分らしく生きることができるよう、どのような支援があると良いのか、患者さん、ご家族、専門職とともに検討しています。</p>	



<p>牧野 夏子 MAKINO Natsuko</p>	<p>准教授 看護学部（成人看護学領域） キーワード：成人看護学、急性期看護学、救急看護、外傷看護、看護実践</p>
<p>看護師を対象とした外傷看護教育に関する研究</p>	
<p>【研究の概要】 外傷とは、交通事故や転落などの外的な要因により身体に衝撃を受けることで、何らかの傷害をきたすことです。 特に、重症な外傷の場合、適切な治療を受けなければ命が助からないことが多くあります。重症外傷患者に対する看護を行う看護師は患者が搬送されると迅速に対応し、一命を取り留めた後も回復に向けてケアを行います。しかし、日本だけではなく海外においても、重症な外傷患者の救命に注力してきた歴史があり、命が助かった後のケアについては体系的な教育が不足しているという課題があります。そこで、重症外傷患者に対する看護を体系的に教育することを目指し、これまでに 4 つの研究に取り組んできました(右図①～④)。その中で、外傷看護特有の学習ニードが明らかになり、看護師の教育方法に関する新たなアプローチが必要であることがわかりました。今年度は、重症外傷患者に対する看護を行う看護師の学習ニードアセスメントツールを開発する予定です(右図⑤)。この調査結果を基に、看護師を対象とした外傷看護の教育方法について検討を重ねていきたいと考えています。</p>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">①看護師の学習内容を書籍から調査</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">②看護師の教育機関における教育内容を調査</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">③看護師の外傷看護に関する学習ニード調査</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">④看護師の外傷看護に関する学習ニードの全国調査</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px; background-color: #fff9c4;">⑤外傷看護に関する学習ニードアセスメントツールの開発</div> <div style="text-align: center; margin-bottom: 5px;">↓</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">外傷看護に関する教育方法の検討</div>

工藤 京子

講師 看護学部（成人看護学領域）

KUDO Kyoko

キーワード：認知症、マフ、身体拘束

高齢化が進む日本（札幌）において認知症マフの認知度をあげる

【研究の概要】

入院がきっかけでせん妄や不穏な状況になる高齢者に対して、安全確保という理由でミトン型手袋を装着している施設は多い。ミトンは身体拘束に該当するが、点滴やチューブの自己抜去など生命に関わる事故の予防も重要である。しかし日常的に行う事で、人の尊厳に対する感性が鈍磨していく恐れもある。

英国の病院では、自己抜去の可能性のある患者にミトンの代替案として Twiddle muff(トゥイドルマフ＝認知症マフ)が活用され身体拘束の最小化につなげている。認知症マフは、筒状に編まれたニットに編みぐるみや花などの小物を縫いつけたもので、手を入れて温めるだけでなく小物を握る事で落ち着く効果もみられている。特に前頭葉の機能低下による強制把握は無意識に何でも握りしめて放すことができなくなる状況であるがマフを握る事で穏やかになると言われている。これは皮膚の感覚を通したコミュニケーションともいえる。

日本でも認知症マフの普及活動が行われているが、歴史的には浅く、実証研究なども非常に少ない。そのため、認知症認定看護師と共に認知症マフを作成する活動を教員と学生で開始した。今後は、作成したマフを病院に提供し活用していただくことで、少しでもミトンの使用が減ると共に、多くの人々に認知症マフを知ってもらうことを目標にしていく。



栗原 知己

助教 看護学部（成人看護学領域）

KURIBARA Tomoki

キーワード：クリティカルケア、集中治療

集中治療室に入院する患者様の 入院中から社会復帰までを支える看護を考える

【研究の概要】

日本全国の集中治療室（ICU）で行われている口腔ケアの実態を報告しました。

全国の病院から得られた回答によると、ほとんどのICUでは1日3回（朝・昼・夕）に口腔ケアを行っており、多くの施設で歯ブラシを使用していることがわかりました。また、約半数の施設では口の保湿ケアも実施していました。

海外のICUと比べると、日本では生活リズムに合わせた時間間隔でケアを行う傾向があり、歯ブラシの使用率が非常に高いという特徴があります。また、今回の調査結果は、ICUにおける口腔ケアの標準的な方法がまだ確立されていないことを示しており、今後のさらなる研究の必要性を示しました。



このイラストはAIが作成しました

澤口 宙人

助教 看護学部（成人看護学領域）

SAWAGUCHI Hiroto

キーワード：がん看護、評価尺度、電子型患者報告型アウトカム

治療中のがん患者が症状を自己報告するために スマートフォンアプリを用いた研究

【研究の概要】

がんの治療中、患者さんが経験するつらさや症状が、医療者に十分に伝わらないことがある。そこで、がん患者さん自身のスマートフォンアプリから症状の重症度を数値化して送信してもらった。

この研究では、第一に、がん患者さんが治療中にスマートフォンアプリを介して、症状を報告することが可能かどうかを検証した。その結果、多くの患者さんは症状を回答可能であった。

第二に、このアプリを使ったことで、患者さんと医師とのコミュニケーションが促進されるか検証した。その結果、医師とのコミュニケーションを大きく変えることはできなかったが、患者さん自身がアプリを健康管理に活用していることが明らかになった。今後は、このスマートフォンアプリを活用して、症状が少しでも和らぐように、患者さん自身、医療者の適切な行動パターンを研究していきたいと考えています。

図：スマートフォンアプリから送信された症状の重症度の一覧

緑色～黄色～赤色の順に症状が重症であることが示されています。●は症状を報告できなかった箇所です。強い症状がある中でも、多くの患者さんがアプリを使って報告できました。

患者 No.	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12	P13	P14
治療前	57	44	-	-	37	11	-	11	-	-	-	-	51	60
Week 1	-	17	72	0	32	●	7	●	0	51	94	61	38	48
Week 2	-	16	99	7	58	●	●	32	7	128	75	59	23	164
Week 3	112	82	119	5	58	●	31	●	32	48	71	36	41	85
Week 4	●	121	142	7	44	●	34	69	37	131	98	47	31	122
Week 5	●	87	133	30	47	●	40	48	62	134	115	53	42	160
Week 6	●	58	131	29	78	●	44	84	●	169	●	66	34	170
Week 7	●	33	168	32	73	●	63	●	81	158	●	54	39	176
Week 8	●	32	134	36	●	●	61	102	●	154	●	29	36	●
Week 9	●	15	134	15	76	●	41	●	50	139	●	28	50	172
Week 10	●	14	134	34	53	●	36	68	24	73	-	20	31	182
Week 11	●	16	178	48	53	●	30	●	12	76	-	13	31	171
Week 12	●	18	149	37	53	●	61	●	7	●	-	10	31	160

平山 憲吾

助教 看護学部（成人看護学領域）

HIRAYAMA Kengo

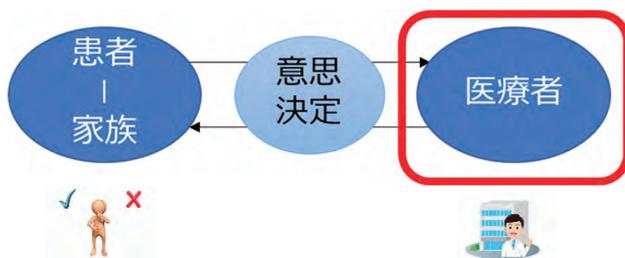
キーワード：がん、薬物療法、有害事象、意思決定、
生活の質（Quality of Life : QoL）、家族

薬物療法を受ける高齢患者の意思決定における医療者の認識に関する研究

【研究の概要】

高齢社会が進み、がんの罹患および治療を受ける高齢のがん患者が増加している。その多くが、薬物療法（いわゆる抗がん剤治療）を受けているが、加齢による心身機能の低下、家族などの周囲の環境変化などを背景として、治療に対する意思決定支援が複雑化している。意思決定では、患者、家族、医療者のそれぞれが関わる事が重要である。

しかし、高齢のがん患者に対する治療の意思決定ガイドラインは少ない。医療者は自身の経験値をもとに高齢者の意思決定支援を行っていることが明らかとなっている。意思決定を支援していく



ためには、患者の希望や価値観を考慮した決定がなされるべきであるが、それらの状況を踏まえた医療者の認識について統一された見解はない。そこで、薬物療法を受ける高齢者に関わる医療者に着目し、患者の意思決定を支援するうえでの認識について明らかにする。

貝谷 敏子

教授 看護学部（老年看護学領域）

KAITANI Toshiko

キーワード：高齢看護学、スキンケア、看護政策・行政、医療経済学、認知症ケア

大学とチームオレンジの共同活動が生むコミュニティ・エンパワメントへの影響

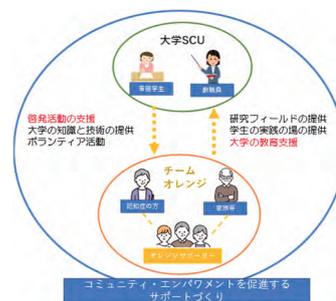
【研究の概要】

札幌市においては、全国平均より若干低いが、2040年には高齢者の14.1%が認知症になると推計されている。超高齢社会において、認知症高齢者が安心して暮らせる地域づくりが課題である。希望を持って暮らし続けられる共生社会の実現を目指し、自治体単位で認知症に関する総合的な施策に取り組んでおり、札幌市においても積極的な対策が実施されている。

札幌市立大学（以下SCU）の立地する桑園地区でも、オレンジサポーターの育成と活動が開始されている。この取り組みでは、チームオレンジは地域包括専任職員による支援を受けながら**認知症者とその家族の支援を通してオレンジサポーター（高齢者）自身の生きがい等にもつなげる効果が期待**されている。SCUが地域の一員としてチームオレンジのサポートに参画し、コミュニティ・エンパワメント（以下CE）を促進することは、大学としての重要な役割である。大学という資源が加わることで桑園地区独自のサポートづくりが期待できる。

そこで2024年度はチームオレンジとともに以下の取り組みを実施した。

- 1) 桑園地区での映画上映会の共同活動を通じた調査
 - 2) チームオレンジ参加型看護過程事例作成の共同活動を通じた調査
- 2025年度はこれらのCEへの評価を実施し、新たなサポート継続する。



原井 美佳

准教授 看護学部（老年看護学領域）

HARAI Mika

キーワード：積雪寒冷地、中山間地域、高齢女性、地域活動の経験

積雪寒冷な中山間地域に暮らしてきた高齢女性の地域活動の経験についての研究

【研究の概要】

わが国では、住み慣れた地域で暮らし続けていくことができるようにという理念のもと、地域包括ケアシステムの構築が推し進められています。特に積雪寒冷で過疎地域に指定されている地域にあっては、お互いに支え助け合う暮らし方やまちづくりがとても大切なものであり、そこには長く住まい風土と共にある伝統を守り伝えてきた女性の経験が豊かに息づいているものと思われました。そこで特別豪雪地帯で高い高齢化率や過疎化率の地域（右図）に住む女性に、お話をお聴きしました。

その主な内容は、仕事と地域活動の両立、まわりの人たちとの協力、地域のために尽くしたい思い、町への思い、地域にとっての活動の意味、活動が生きがい、活動の支えになっているもの、これからの地域について思うことについて等、示唆に富む内容でした。現在これらの内容から、積雪寒冷な中山間地域における地域包括ケアシステムに活用できる視点を見出すことに取り組んでいます。そして何よりもお話を聴かせていただいた対象者の方々と地域へ、結果をお返りする準備を進めています。



* 科学研究費基盤研究費 C
課題番号 21K02152
* 札幌市立大学倫理委員会
通知 No.2147-1

西川 めぐみ

助教 看護学部（老年看護学領域）

NISHIKAWA Megumi

キーワード：高齢看護学、腎臓移植、アドヒアランス、看護倫理学

腎臓移植レシピエントとドナーへの支援に関する研究

【研究の概要】

末期腎不全の腎代替療法には、血液透析、腹膜透析、腎臓移植の3種類があります。腎臓移植は透析治療からの離脱により、生命予後の改善だけではなく、最も生活の質（Quality of life: QOL）の向上が期待される治療方法です。

しかし、腎臓移植を受ける方（レシピエント）は、移植手術や術後の回復など、様々な不安を有しており、心理面にも様々な影響を及ぼすことが報告されています。また、生体腎臓移植において、腎臓を提供するドナーにおいても、手術前は提供について周囲の理解を得ることへの困難や不安を表出にくいこと、手術後は医療者の関心がレシピエント中心となったと感じるなどの心理面への影響が挙げられています。そのため、レシピエント、ドナーの移植後のQOLを維持、向上するためには、身体面だけではなく、メンタルヘルスへの支援が重要と考えられます。

腎臓移植レシピエントや生体ドナーの方が、どのような支援を必要としているのか、その内容や支援に対する患者の評価を明らかにし、今後のレシピエントや生体ドナーの方への心理的支援へ活かしていきたいと考えています。



松浦 有沙

助教 看護学部（老年看護学領域）

MATSUURA Arisa

キーワード：脳卒中、終末期ケア、看護実践、困難感

脳卒中患者の終末期ケアに対する看護師の実践と困難感

【研究の概要】

脳血管疾患は日本人の死因第4位です。中でも脳卒中（脳梗塞や脳出血など）は発症から死亡までの病期が個々により異なるため、予後予測が困難な疾患です。また、脳卒中の発症後には意識障害や言語障害、高次脳機能障害などの後遺症を抱える場合もあり、患者が自身の終末期医療に対する希望を伝えられないことも少なくありません。そのため、終末期のケアを行う看護師も患者の希望がわからず、ケアを実践しにくいことや、困難に感じていることがあるのではないかと考えました。

一次脳卒中センターを有する病院で勤務する看護師を対象に、『脳卒中患者の終末期ケアとして何を行っているか・どんな困難があるか』についてアンケート調査を行いました。最も高い実践率であったのは「吸引や抑制の必要性について評価している」でした。一方で、「積極的治療について患者や家族と話し合っている」かについては、実践率が低い現状が明らかになりました。看護師が最も困難感を抱いていたのは「心肺蘇生処置が行われること」であり、予後予測が難しい疾患であるということが要因の一つではないかと推察します。

今後はより多くの施設でのデータを収集していくと同時に、脳卒中患者に対して、どのような方法で終末期ケアに対する希望についての話し合いを進めていくのが良いか、検討したいと考えています。



石橋 佐枝子

准教授 看護学部（精神保健看護学領域）

ISHIBASHI Saeko

キーワード：児童・青年期の精神症状のアセスメントと支援、オープンダイアログ、メンタルヘルス

児童・青年期の精神症状や困難さを抱えるお子さんとそのご家族への支援

【研究の概要】

児童青年期における精神症状への早期発見・介入の重要性を感じ、ご家族や学校の先生が児童・生徒の精神症状を適切に理解し、医療福祉職が多職種で連携して支援できるようにするための研究を進めています。その一環として、フィンランド発祥の対話型アプローチである「オープンダイアログ」を日本の看護基礎教育で取り入れ、臨床現場に普及させる試みにも取り組んでいます。

【研究成果】

- 子どものADHD、反抗挑発症、素行症などの外在化障害を早期発見するための評価尺度（ADHD-RS-5、DBD-RS）日本語版の開発（論文、ASCAPAP2023 BEST POSTER AWARD 受賞）
- 児童精神科の診断用半構造化面接 K-SADS-PL-5 日本語版の開発（論文）
- 書籍「サイコーシスのためのオープンダイアログ」（分担翻訳）
- 看護教育におけるオープンダイアログ（OD）の取り組み（論文）



守村 洋

准教授 看護学部（精神保健看護学領域）

MORIMURA Hiroshi

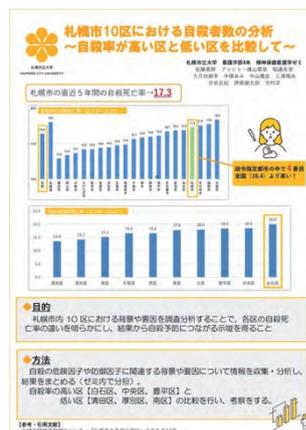
キーワード：メンタルヘルス、自殺予防、シミュレーション教育、精神障害者地域支援

メンタルヘルスに関する研究

【研究の概要】“メンタルヘルス”に関連する幅広い内容の研究活動をしております。

- ① 札幌市自殺総合対策；精神保健看護学領域のゼミ活動として、「札幌市 10 区における自殺者数の分析」に取り組みました。成果発表として、白石区健康・子ども課地域密着型自殺対策事業の一環として札幌コンベンションセンターで開催された「第 49 回白石区ふるさとまつり」(9/1) や、本学桑園キャンパスで開催された「桑芸祭」(9/23) で展示・発表しました。

- ② 地域住民に対する講演会活動；札幌市立大学専門セミナー こころの健康講座「3月には自殺対策強化月間です」(3/1) を企画しました。誰も自殺に追い込まれることのない社会の実現に向けて、自殺について正しい知識を修得し、他者にできる・自分のための自殺予防について講演しました。



渋谷 友紀

助教 看護学部（精神保健看護学領域）

SHIBUYA Yuki

キーワード：精神看護学、シミュレーション教育、看護基礎教育、メンタルヘルス

シミュレーション教育で磨く看護実践力とその成果の評価

【研究の概要】

精神障害を有する患者の体験は、学生にとって捉えにくく、症状に応じた適切な対応技術が要求されるため、現場での実践は決して容易ではありません。その結果、実習現場では、看護学生が患者の発言に戸惑い、自身の感情が乱される中で、従来学習してきた技術を十分に活かしきれない状況が見受けられています。

一方、シミュレーション教育の大きな利点は、現場に出る前に安心してチャレンジし、失敗を経験できる点にあります。失敗の振り返りを通じて、学生は自己の課題を認識し、学びをさらに深めることが可能となります。看護基礎教育においては、こうしたシミュレーションの導入が、実習での効果的な技術習得を促進し、臨床現場での柔軟な対応力の育成へとつながると考えられます。



教育の究極の目的は、講義で習得した基本的な看護技術を実際の看護実践に応用・定着させることにあります。したがって、シミュレーション教育を通して、具体的にどのスキルが身についたのか、またその応用可能性を明確に評価する必要があります。

青柳 道子

教授 看護学部（在宅看護学領域）

AOYANAGI Michiko

キーワード：終末期がん患者、看護師、対話力、意思決定支援

終末期がん患者の望む生き方を支える看護師の対話力獲得過程に関する研究

【研究の概要】

終末期がん患者が残された日々をどこで、どのように過ごすかを決定することは、悔いなく生きるために大変重要です。患者と最も接触する機会が多い看護師は彼らの意思決定を支える役割を担っていますが、その際に必要な対話力の個人差は大きく、十分に役割を果たせていない看護師もいます。しかし、なぜそのような個人差が生じるのかは明らかではありません。そこで本研究では、看護師の対話力がどのように獲得され、その獲得に影響を与える要因は何かを明らかにすることをめざしています。

本研究により対話力の獲得過程と影響要因が明らかになることで、看護師個々の力量にあった教育が可能となり、看護師の対話力の向上を図ることができると考えます。そのことは、終末期がん患者の望む生活の実現に役立つものと思います。

まずは、経験豊富な看護師へのインタビュー調査を行い、それらを分析することで対話力獲得過程の一端を明らかにしていきたいと思えます。

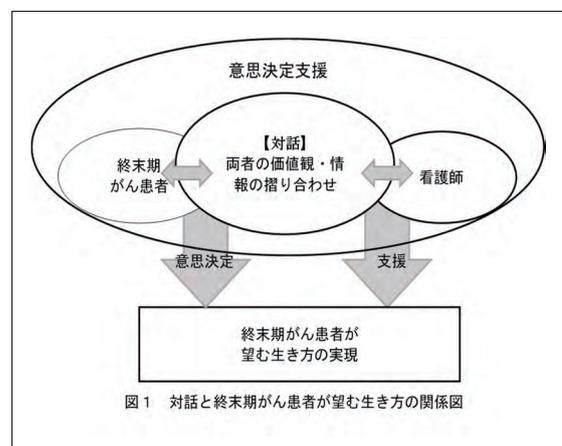


図1 対話と終末期がん患者が望む生き方の関係図

服部 裕子

特任講師 看護学部（在宅看護学領域）

HATTORI Yuko

キーワード：在宅看護、訪問看護、新卒訪問ナース、育成

新卒（新人）訪問ナース育成支援に関する研究

【研究の概要】

近年、一人暮らしの高齢者や高齢者夫婦世帯、慢性的な疾患を抱えながら生活していく方々が増えていきます。住み慣れた地域で最期まで「その人らしい」生活を送るには、訪問看護師の力が必要となります。この超高齢社会において地域で活躍する若年層の訪問看護師の育成が課題であると認識し、2017年度に近郊7大学の在宅看護を専門とする大学教員で、「新人訪問ナースを応援する会（通称：スタタン）」を立ち上げました。現在は「ほっかいどう新人訪問ナース教育研究会（愛称：スタタン）」と改名し、活動を行っています。活動として、新卒訪問ナースの仲間づくりや新卒訪問ナース採用・育成に関する調査研究、新卒訪問ナースの雇用を考えているステーションや雇用しているステーションのサポート、「新人訪問ナース応援フォーラム」を開催しています。

「新卒訪問ナース応援フォーラム」は今年で開催6回目を迎えました。2025年は、新卒から訪問看護をスタートさせた8年目の看護師による講話や新卒1～3年目の訪問ナース・教育担当者からのお話、後半は交流会といったプログラムで開催しました。本フォーラムを継続していくことで、在宅看護に興味・関心のある学生が現実的な進路の一つとして訪問看護を目指す雰囲気をつくること、訪問看護ステーションで新卒訪問ナースを受け入れ、育てていくための考え方やプログラム提案の機会としていきたいと考えています。



尾立 斗志世

助教 看護学部（在宅看護学領域）

ODACHI Toshiyo

キーワード：在宅看護学、在宅ケア、訪問看護、難病看護、社会参加

成人前期に難病を発症した人の社会参加に関するレジリエンスの研究

【研究の概要】

私は20～30歳の時期に難病を発症した人が、難病によって中断された様々な社会参加をどのように継続したり、再開したり、新たに始めることができるようになったのかについて関心を持っています。「難病」とは希少で治療法が確立していない病気のことを指します。また、本研究では「社会参加」を家族以外の人と関わる機会や趣味や仕事、学習、ボランティア活動など社会とのつながりを持つ活動のことを広く指します。難病療養者は、症状の悪化や体調の変化、周囲から病気の理解が得られにくいことで社会参加を中断せざるを得ないことがあります。しかし、そのような中でも様々な工夫をして社会参加を継続、再開、開始できた難病療養者が「どのようにして社会参加できたのか」を調査しています。この状況を「レジリエンス：逆境から回復する過程」という視点でとらえ、難病療養者が病気に伴う困難を乗り越える過程を明らかにしたいと考えています。

難病療養者がその人らしい人生を送れるために、看護としてできることが何かを検討しています。



図1 難病療養者のレジリエンス（イメージ図）

原口 弘美

特任助教 看護学部（在宅看護学領域）

HARAGUCHI Hiromi

キーワード：統合失調症、訪問看護、精神科訪問看護、
精神科臨床経験がない訪問看護師、看護ケア

精神科病院での勤務経験がない訪問看護師による 統合失調症の利用者への看護ケアに関する研究

【研究の概要】

我が国は、精神障害者が地域の一員として安心して自分らしい暮らしができるよう、精神障害にも対応した地域包括ケアシステム構築と地域における生活の維持を目標にしています。また、精神障害への効果的な訪問看護の提供を推進しています。精神疾患を有する患者数は年々増えており、訪問看護ステーションを利用している精神障害者も増えていますが、精神科訪問看護を実施している訪問看護ステーション数は横ばいとなっています。

その背景には、精神科病院での勤務経験がある訪問看護師が少ないことや精神科訪問看護の看護ケアの実践に苦慮していることが考えられ、精神科病院での勤務経験がない訪問看護師の統合失調症の利用者への看護ケアを明らかにしたいと考えました。

訪問看護師は、信頼関係が構築できるように配慮しながら、精神症状に対しての看護ケアを提供していることがわかりました。

精神障害者が住み慣れた地域でその人らしく生活できるように、訪問看護師の看護ケアを習得する過程や質について検討していきたいと思えます。



上田 泉

教授 看護学部（地域看護学領域）

UEDA Izumi

キーワード：父親支援、教室、子ども虐待予防、妊娠期

妊娠期の父親支援ニーズに立脚した日本版 BPP の実証的研究

【研究の概要】

本研究は、子ども虐待予防を重視した妊娠期における父親支援ニーズを明確にして、日本版 Becoming Parents program(BPP)を開発し、効果を検証することでした。教室を開催するために、チラシ、教材づくり、スライド作成、台本、ワークシート作成し、実際は on-line にてシリーズで実施しました。父親は、妊娠期のパートナーへの支援に関する具体的な情報を求めていることがわかりました。BPPは「話し手と聞き手の技法と問題解決」という16のエクササイズが基本的なスキルです。BPPのスキルをベースにクラスの企画を立案し、実践して効果を検証しています。

おしさんを妊娠中のパパ・ママになる皆様へ

妊娠期から健やかに過ごすために
-より良いパートナーシップを学んでみませんか-

参加協力いただいた方へ
クオカードを差し上げます

妊娠期から健やかに過ごすために、
パートナーとのより良い関係性を育むコツを学ぶ
参加型のプログラムです。
コミュニケーションの基本を学んでみませんか。

開催日程 ① 2022年11月11日・18日・25日（合計3日間、各回18：30～）
② 2023年1月15日・22日・29日（合計3日間、各回10：00～）

対象 妊娠中後期の方とそのパートナー（夫婦10組（定員あり））

方法 教室に夫婦で参加（上記①か②のいずれか3回全てにて夫婦で参加ください）
参加前後のアンケート調査への回答 など

場所 オンライン開催（ZOOM）

申込方法 下記のQRコードからお申込みください。

プログラム概要
1回目 コミュニケーションの基本

申込について

本田 光

教授 看護学部（地域看護学領域）

HONDA Hikaru

キーワード：ソーシャルサポート、社会的孤立・包摂、
地域のつながり

あらゆる世代、健康状態、社会状態にある人々の“つながり”の重要性

【研究の概要】

社会的孤立は公衆衛生の分野において、各国で研究が重ねられており、今や世界的な関心事の一つになっています。例えばイギリスでは孤独担当相が任命され、国策としてこの問題に向き合っています。日本でも、令和5年6月に孤独・孤立対策推進法が交付され、内閣府に対策室が設置、担当大臣も任命されています。

私は2024年から1年間、タイのチュラロンコン大学公衆衛生大学院大学に研究留学しています。子育てにおける社会的孤立と孤独を研究課題にして取り組んでいますが、「子育てはハッピーよ！タイの母親は孤独なんて感じてない！」「孤独なんて、豊かな国の贅沢な健康問題だね！」などと指摘され、なかなか苦戦しています。

多数派の日常生活からは、健康マイノリティーの実態は見えにくいのかもかもしれません。しかし、社会の階層性と格差が日本以上に激しいこの国、また東南アジアの国々において、この問題が無い訳ではありません。こうした人々の存在に注目し、アドボケートするのが私の仕事です。研究留学をとおして、国際的視座から改めて孤立と孤独の問題に対する理解を深めているところです。



市戸 優人

准教授 看護学部（地域看護学領域）

ICHINOHE Yuto

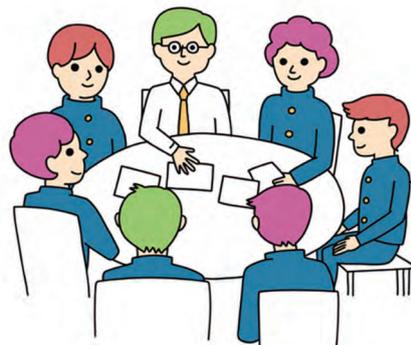
キーワード：性教育、アクティブラーニング、教材開発

アクティブラーニングを取り入れた“話し合う性教育”の提案

【研究の概要】

知的障害のある子どもの性の健康と安全を守るため、特別支援教育で活用可能な性教育教材を開発しています。教材は、思考力・判断力・表現力を養うことができるよう、アクティブラーニングを取り入れた“話し合う性教育”を展開することのできる教材となっています。教材には、ユニバーサルデザインを取り入れることで、知的障害のある子どもを含め、誰もが活用できる教材となっています。

現在は、誰もが性教育にアクティブラーニングを取り入れることができるよう、“話し合う性教育”を実施する上で、どのような“学習環境デザイン”が必要であるかを明らかにする研究に取り組んでいます。学習環境デザインが明らかになることで、アクティブラーニングを取り入れた“話し合う性教育”を実施する際の指針となり、“話し合う性教育”の普及に繋がると考えています。



近藤 圭子

助教 看護学部（地域看護学領域）

KONDO Keiko

キーワード：高齢者の健康、自己効力感、健康行動、地域医療、過疎地域

過疎地域に居住する高齢者の健康に関する研究

【研究の概要】

これまでに地域在住高齢者の健康と生活の質（QOL）に関する研究を実施している。北海道の過疎地域において、高齢者の健康行動や保健医療福祉に対する意識、アドバンスド・ケア・プランニング（ACP）に関する認識などを中心に調査を実施してきた。

北海道は、都市部と農村部の医療資源の偏在が顕著であり、冬季には積雪や豪雪といった自然環境による生活制約も大きい。こうした地域特性のもとで、高齢者が可能な限り介護を必要とせず、自立した生活を継続するためには、地域の実情に即した支援体制の構築が不可欠である。そのため、高齢者の健康を支える上での課題や、地域医療に対する住民の意識とニーズの把握に努めている。

加えて、地域医療に対する住民理解を深めるためのアプローチ手法についても検討を進めている。今後は、都市部に居住する高齢者との比較を通じて、地域間における健康意識や支援ニーズの違いを明らかにし、地域特性に応じた保健医療支援の在り方を提言していくことを目指している。最終的には、どのような地域に暮らしていても高齢者が「自分らしく最期まで生きる」ことのできる地域の実現に寄与したいと考えている。



田仲 里江

助教 看護学部（地域看護学領域）

TANAKA Rie

キーワード：遺族ケア、保健師

大規模災害時等の遺族ケアにおける保健師の役割

【研究の概要】

日本における遺族へのケア、とりわけ大規模災害などの予期せぬ出来事によって大切な家族を失った遺族への看護ケアは、今後の重要な課題であると考えています。日本は地震や台風、豪雨などの自然災害が頻発する国ですが、災害による遺族への支援体制はまだ十分に整っているとは言えません。災害による突然の死別は、遺族に計り知れない悲しみと心理的負担をもたらします。しかし、現在の支援は、遺族が長期的にどのように心理的变化をたどるのか、その実態については十分な研究がなされていません。

これまでも遺族ケアに関わってきた DMORT（災害死亡者家族支援チーム）、法医学者、そして地域で遺族に寄り添う市町村保健師を対象に調査を行うことで、災害遺族への支援における看護職や保健師の役割を明らかにすることを目指しています。

特に、市町村保健師による継続的な遺族支援は、地域に根ざした支援として大きな役割を果たす可能性があります。今後も日本では自然災害の発生が避けられないと考えられるため、災害後の遺族への支援の重要性はますます高まるでしょう。こうした支援のあり方を検討し、遺族へのケアの隙間を埋めることが、重要になると考えています。



出典：看護 roo! イラスト集

3. AIT センター

高橋 尚人

教授 AIT センター（情報学）

TAKAHASHI Naoto

キーワード：深層学習、物体検出、物体追跡

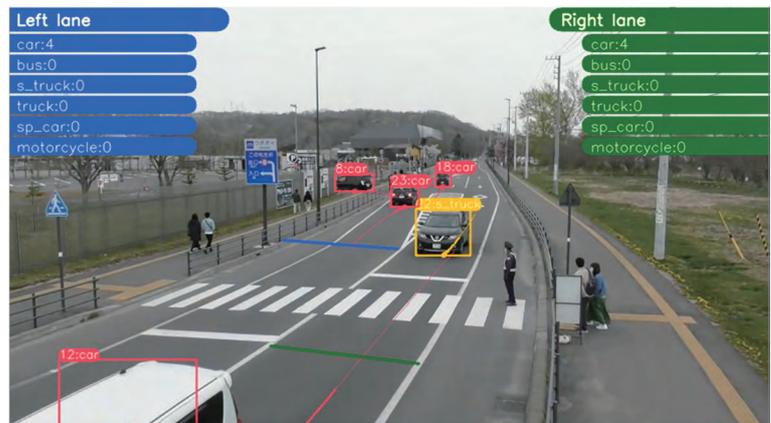
物体検出・物体追跡技術を用いた交通量調査プログラムの開発

【研究の概要】

交通量調査は、道路の計画や設計、管理等における最も基本的な調査事項である。従来の調査手法として、調査地点の交通状況が直接視認できる場所に調査員を配置し、数取機によって車両台数を計測する人手観測があるが、調査の特性上、調査員の確保が困難な状況である。

そこで、本研究では、交通量調査の省力化・省人化を目指し、ビデオ画像を処理することで交通量を計測するプログラムの開発に取り組んだ。当該プログラムは、物体検出技術で検出した車両を物体追跡技術で追跡し、画像上に設置した計測断面を跨いだ場合に台数をカウントする仕組みとなっている。

既往の交通量調査で撮影したビデオ画像で精度を検証した結果、90%以上の精度で車両台数を計測できることを確認した。



交通量調査プログラムの出力例

津田 一郎

特任教授 AIT センター（情報学）

TSUDA Ichiro

キーワード：複雑系、カオス、ニューラルネット、脳、応用数学

カオス力学を基軸にした複雑系脳科学

【研究の概要】

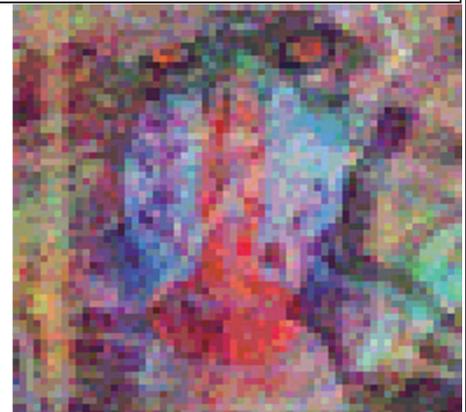
私の研究の目的は、脳科学の数学的諸原理を明らかにし、その成果を医療などに役立てることです。カオスやフラクタルなどの複雑系科学の考えに基づいて研究しています。

人々が日常の経験を覚えることができるのは海馬を経由して新皮質でエピソード記憶が形成されるからです。図はエピソードからエピソードへのカオス的な遷移を表したものです。ヒトや哺乳動物に共通した大脳新皮質の神経回路の構造を模して興奮性神経細胞からなる連想記憶回路に抑制性神経細胞を導入することで得られました。現代の生成系 AI の基盤を作っている人工ニューラルネットである Transformer に採用されている attention 機構は、重みの高いパターンへの遷移を起こす静的なものです。本研究の動的神経回路は、神経回路が自律的に記憶パターン間の遷移を実現します。さらに最近、本研究をもとに AI の一種であるリザーブ計算機を使って脳の様々な機能分化の研究をしています。脳の情報処理の階層構造がなぜできたのかという問いへの一つの解答が得られました。

記憶間のカオス遍歴(Scholarpedia:

Chaotic Itinerancy より。

http://www.scholarpedia.org/article/Chaotic_itinerancy ©Ichiro Tsuda)



岡崎 昌太

助教 AIT センター（情報学）

OKAZAKI Shota

キーワード：AI、深層学習、画像認識、歯科、医用システム

深層学習による放射線画像からの歯科口腔疾患の検出

【研究の概要】

口腔の健康と全身の健康には関係があり、歯科口腔疾患の早期発見・早期治療は、生活の質の向上に寄与します。歯科口腔疾患の検出には、パノラマエックス線などの放射線画像を頻繁に使用しますが、単独の画像のみでは検出が困難な疾患もあります。

近年、人工知能の応用可能性が多く分野で検討されており、特に人工知能の一手法である深層学習は、画像認識分野において優れた性能を示しています。

そこで本研究では、深層学習技術を活用し、放射線画像から歯科口腔疾患の検出を支援する人工知能システムの実現可能性を検討しています。



札幌市立大学 教員研究紹介 2025

編集 札幌市立大学研究支援地域連携センター

発行日 2025（令和7）年7月15日

発行 札幌市立大学研究支援地域連携センター

〒005-0864 札幌市南区芸術の森1丁目

TEL.011-592-2346

FAX.011-592-2369

<https://www.scu.ac.jp>

E-mail:crc@scu.ac.jp



www.scu.ac.jp

札幌市立大学

SAPPORO CITY UNIVERSITY